

---

# フラットなアオ（ワールドレシビ°）

イナゴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フラットなアオ（ワールドレシピ）

### 【Nコード】

N0877I

### 【作者名】

イナゴ

### 【あらすじ】

少年クリスは旅に出る。妖精シルフィをお供にして。それは村のしきたりだった。道中いろんな人に会う予定。事件にも巻き込まれる予定。そして無事解決する予定。予定は未定。

## その1

雑草だ。

いたるところに雑草が生えている。

——草ぼうぼう。

だから誰が思うことだろう。

この畑に人の手が入らなくなって久しい、と。

だがそうではなかった。

なぜなら雑草の中で、なにやらかがみこみ、そして今腰を上げた少年の手には、薄い紫色の表皮を持つ野菜——芋の一種だ——が握られていたからだ。

しかしそれは偶然にも少年が見つけたというわけでもないようだった。

少年は背負っていた籠にその芋を放り込んだ後、再び草の中にかがみこみ、そしてまた芋をひとつつかみあげて、同じように籠の中に入れたからだ。

しつかりと、ここは『畑』であった。

雑草と共存しているのである。

それもこの土地が肥沃だからこそだ。

『女神に祝福された土地』

昔からこのあたりの土地がそう呼ばれているゆえんだった。

背中に背負った籠が満足いく重さになったのか、少年は腰を伸ばすと、雑草を掻き分けて畑から抜け出す。そして荷車に籠を下ろすと、もう一度覗き込み、今日の収穫に満足そうに微笑む。もうひとつの籠から赤い果実をひとつ取り出すと、地面に腰を下ろす。

「いいの、取れたあ」

頭上から聞こえた突然の声に、しかし少年は「うん」と驚くこともなく答え、果実にかぶりついた。

「あー、私にもちようだあい」

またしても頭上から声。少年はやはり驚くこともなく、咀嚼し甘い果実を味わっている。

そんな少年の眼前に、ふいと何かが飛んできた。

それはトンボのように、左右に二枚づつの羽を持っているが、トンボではなかった。虫でもなかった。

女の子だった。

少年の手より少し大きい、しかしやはり小さな女の子。

小さな女の子とはいっても、その概観は幼女などではなく、12,

3歳の、少年とおなじ年頃の少女にしか見えない。

といっても彼女が人ではないことは明らかで、背中から生える大きな羽が、彼女が何者なのかを物語っていた。

妖精だ。

## その2

少年は目の前で妖精が目に見えないほど高速に羽を動かしているのを見ても驚かない。

それどころか「ねえ、私にも。私にもちょうだい」そうせがむ妖精に向かって持っていた果実を「ん」と言っただす。

妖精はうれしそうにその赤い果実によっていき、少年のかじった後の白い果肉に、その小さな歯を立てる。

口いっぱい頬張る。

咀嚼しながら「おいしい」ととても幸せそうな声を出す。

荷車を押しながら、少年は肩にとまっている妖精に声をかけた。

「ねえ、シルフィ。せっかく羽があるんだからさ。飛べば」

「やあよ。疲れるもん。それに今はお腹いっぱいだし。食後すぐの運動は体に良くないんだよ」

「運動じゃないだろ。飛ぶ、なんてさ。シルフィにとったら僕たちが歩くのと同じようなものだろ」

「そうよ。だけどクリスにだって歩くのも面倒なときってあるでしょ」

少年——クリスが歩を進めるたび、もちろん彼の体は揺れる。上下する。

その方に止まっている妖精——シルフィにすれば、嵐の海に行く小船に乗っているような状態だろう。

しかしシルフィは器用にバランスをとりながら、クリスのかたに腰を下ろしている。

クリスは思う。

ただ飛ぶよりもそのほうがよっぽど面倒じゃないのかな。

「全く。ああ言えばこう言うんだから」

「悪かったわね。性分よ。素直じゃないの」

開き直る妖精に少年はため息をついた。

夕暮れ前に家に帰り着くと、クリスは荷車を納屋にしまい、今日の収穫が詰まっている二つの籠を家の中へと運ぶ。

シルフィはというと、すでにクリスの肩から離れ、しかしやはり飛ぶのは面倒なのか、適当なところに腰を落ち着けて羽を休めている。夕食の準備に、クリスは取り掛かる。

今日採ったばかりの野菜をぶつ切りにし、水を張った鍋に放り込み、ぐつぐつと煮る。

ころあいを見て、木の実や野草（ハーブの一種）から作った調味料、塩（とても貴重品なのだ）を入れる。

味見をし、満足そうに頷く。

椀にそれを取り食卓へと運んでいく。

小麦をといて引き伸ばし焼いたかたパンと一緒に。

食卓におかれた食事は二人分ある。

「おじいちゃん、出来たよお」

クリスは奥の部屋に声をかけた。

机の上でなにやら書き物をしていた様子の祖父であったが、孫の声を受けると「今いく」そう答え立ち上がった。

祖父が食卓に着いたのを確かめると、クリスは手を合わせ

「いただきます」

「いただきます」

祖父もシルフィも（シルフィは椅子に腰掛ける、と言うわけにも行かないので、食卓にじかに座っていた。行儀が悪いが仕方がない）同じように手を合わせた。

「ご馳走様でした」

と、最初に手を合わせたのはシルフィだった。

確かに彼女が食べた量は、クリスたちに比べ圧倒的に少ない。

しかしそれに比例して、彼女の体は小さいのだ。

比率的な面で言うと、クリスたちの食事の量とシルフィのそれは、そう変わらない。

つまりはシルフィは早食いなのだ。

噛んでいたパンを飲み込んで、クリスは困った顔をシルフィに向ける。

「いつも言ってるだろ、シルフィ。そんな食べ方じゃお腹壊すって。もっとよく噛まない」と

「大丈夫よ。見た目と違って私、頑丈に出来てるんだから」  
いつもと同じ返事にクリスはため息をつく。

そんな孫を見て祖父は笑うのだ。

「ははは。お前たちは本当に仲がいいな。毎日毎日同じ問答の繰り返しだ」

「だってシルフィが僕の言うこと聞かないから」

「だってクリスが私の言うこと聞かないから」

二人の声が重なる。

クリスとシルフィは思わず困ったように互いを見やる。

祖父は笑った。

食事を終えて腹がこなれるまでの小休止を取っていると、祖父が話しかけてきた。

「クリス。人生とは例えるならなんだと思う」

突然で突拍子もない問いにクリスは呆れながら

「……いきなりだね。おじいちゃん」

「旅、だとは思わんか」

祖父は孫の呆れように構わず続ける。

「旅の道中で人はいろんなものを見て、たくさんの人に出会い、さまざまな経験をする。

人生も然り。

人は生きていく中で、いろんなものを見、たくさんの人に出会い、さまざまな経験をする。

そうでない人生などはない」

力説する祖父に、クリスはまたもや呆れながら

「それはそうだけど、いきなりなんなの。おじいちゃん」

「うむ、つまりだな」

またもや唐突に、祖父は言った。

「クリスよ。旅に出ろ」

「……なんなの。いきなり」

クリスは同じ言葉を繰り返していた。

祖父は悪びれずにこたえる。

「確かにお前にとっては突然の話だろう。しかしそうではないのだ。

これは村のしきたりなのだよ」

祖父を見返すクリスの顔。

理解していないのは明らかだった。

「13歳になれば、皆この村を出、旅立たなくてはならないのだ。

一年間は、誰にも頼らず一人で暮らす。

つまりは修行なのだ。

わしも、お前の母さんも、村の者は皆そうしてきた」

「母さんも……」

「うむ、そうだ。しかし戻って来たのは五年後だった。

生まれたばかりのお前を連れてな。

そしてお前を置いて、また旅立ってしまった……。

すまん、クリス。わしはそれを止めることが出来なかった。

しかしお前はこうして立派に育ってくれた。感謝しているよ」

「やめてよ。感謝だなんて……。

でも、そうか。そんなしきたりがあったんだ。全然知らなかった」

「うむ。ちなみにわしが今日、突然、こんなことを言い出したのも、しきたりのうちだ。

直前までは内緒なのだよ」

本当かなあ。

と、思わないでもなかった。



祖父はすっかり忘れていただけではないのだろうか。

祖父が意外とうっかりものだということを、クリスはよく知っている。

でも、大丈夫だろうか。

クリスはこの村を出たことがない。

それなのに、一年間も一人で暮らさなくてはならないなんて。

でも、村の人たちはみんなそうやって大人になったんだ。

すごいな……。

「不安なのか？」

黙りこんだクリスに、祖父は声をかける。

「それはそうだよ」

素直に答える孫に、祖父は安心させるように、笑顔を向けた。

「心配しなくてもいい。シルフィも一緒だから」

「ちよつと。何で私!？」

我関せず、と大の字になってテーブルの上で寝そべっていたシルフィだが、その言葉を聞くと、ばね仕掛けが働いたように跳ね起きた。祖父はその小さな姿に頭を下げる。

「頼むよ、シルフィ。お前が一緒ならわしも安心できる。

それにクリスがいなくなったらお前もさびしいだろう？」

どうやら凶星であったのか、黙り込み、それから考える様子を見せて、わざとらしいため息をついた。

「はあ。仕方ないわね。

グラハムにそこまで言われたら、断れるわけじゃないじゃない」  
はあ。

もう一度、わざとらしくため息をつく。少年を見上げ

「そういうわけだから、クリス。私も一緒に行ってあげる。

これで安心でしょ。感謝しなさいよ」

シルフィの声は弾んでいる。

彼女の中で、二人はもう旅を始めているようだった。

「うん。ありがとう」

クリスの声も弾んでいる。

不安が消えたわけではないが、シルフィと一緒に旅が出来ると思うと、楽しみにもなってくる。

クリスは微笑む。

グラハムも微笑む。

シルフィはにんまりと笑った。

翌日は村のみんなへのあいさつ回りで終わった。

次の日は、それを受けてのクリスの送別会の準備に費やされた。

そして明くる日はもちろん送別会。

当然のように、朝から晩までお祭り騒ぎ。

そういうわけで、クリスの旅立ちは次の朝ということになった。

村人総出の見送りを受けながら、クリスとシルフィは今、旅立とうとしている。

彼らの、別れを惜しむ声、激励の声に、それぞれに答えていく。

そして――

「おじいちゃん……」

グラハムを残すのみとなった。

他の皆は、ただ静かにグラハムとクリスを見守っている。

グラハムは、とても優しい微笑を浮かべて、孫を見つめている。

中々くちを開こうとしない。

クリスは祖父の言葉を待つ。

グラハムは唐突に喋りだした。

「本当のところを言うとな、クリス。わしは昨日の夜、いろいろと考えたんだ。

あれを言おう、これを言おう、とな。

しかし実際そのときになると――」

グラハムは照れたように笑う。

「言葉が出てこんもんだな。いや、まいったよ」

緩んだ頬を引き締めると、今一度、孫の顔をじっと見つめ、言った。  
「クリス。わしはただお前の旅の無事を祈っておるよ。」

この村に戻ってくるのを、待っておるよ」

「おじいちゃん……」

クリスも、グラハムと同じように、別れの言葉をあれこれと考えていた。

しかし結局、何も言えなかった。

「……うん」

クリスはただ頷く。

「それじゃあ、行って来ます」

「うむ。行って来い」

グラハムは短く答える。

クリスは村人のみんなに改めて視線を移すと

「それじゃあ、みんな。行って来ます」

「行ってらっしゃい」

村人たちの声が合わさる。

クリスは小さく笑い、最後にもう一度

「行って来ます」

そういつて、彼らに背を向ける。

シルフィは、クリスの肩に腰掛けたまま身をひねって、村人たちに手を振る。

「じゃあねえ、みんな。元気でえ」

彼らの姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

そしてもう視界に人の姿がなくなると、再び前を向いて

「じゃあ、行こう、クリス。」

街道に出るには山ひとつ超えなきゃならないんだから。

のんびりしてらんないよ」

「……うん」

クリスは頷き、そして振り返った。

「どうしたの？」

いぶかしむシルフィには答えず、クリスは青い空の下に広がる山々――森の緑を見つめた。

村はその緑の中に隠れている。

村人たちも、祖父の姿も、もう見えない。

クリスは泣いていた。

うつむいて、声を立てず、ただ静かに。

クリスの肩で器用にバランスをとりながら、シルフィは呆れたように言った。

「何。泣いてんの？」

「だって、だってさ……」

クリスの声は涙で揺れている。

シルフィにもクリスの気持ちは分かる。

親しい人たちと別れるのはつらいものだ。

シルフィにだってそれぐらい分かる。

彼女自身、そうなのだから。

「……分かるけど。」

泣いてたって仕方ないでしょ。

ほら、行こう」

クリスはすぐには答えない。

声を立てずに泣き続けている。

シルフィはそれが気に食わなかったようだ。

むっとした表情を作ると、クリスの肩から飛び立った。

「じゃあ私、先に行くから。」

クリスは好きなだけ、そこでそうしてなさい」

その声にクリスは涙をぬぐう。

「待ってよ。今行くから」

あわてて、妖精の後を追った。

### その3

今夜は野宿しかないようだった。

月が出ているとはいえ、森の中だ。

陰になっているところはどこまでも暗いし、木々たちはもちろん、人間の都合などお構いなしに、そこかしこに文字通り林立している。彼らの領土を、そうやって守っているのだ。

夜が広がる森の中でも、歩けないわけではない。

先に進もうと思えば進める。

しかし別に先を急ぐ旅でもないの、クリスとシルフィは、野宿するのに適した場所を探していた。

やはり少し拓けた場所がよい。

シルフィは、そんな必要はないといったのだが。

好きな場所で眠ればよいと。

「だって私がいるのよ。森のみんなが悪さするはずないじゃない」確かに風と森の妖精（自称）のシルフィ・シルフィーナが側にいれば、森の獣たちが襲ってくるなんてことは（彼らの大半が眠りについているとしても）ないのかもしれない。

しかしクリスには一抹の不安があった。

決してシルフィを信用していないわけではないのだが、彼女の言葉には素直に頷けなかった。

えー。なんでよう。

納得いかない様子のシルフィに、クリスはその理由をはっきり言うことも出来ず、苦笑を返した。

今はけんかするのも面倒だ。

さすがに疲れているのだろう。

ぶんぶんと頬を膨らませ怒っていても、クリスの肩から飛び立とうとはしないシルフィだったが、突然クリスの耳をその小さな手で引っ張る。

張り詰めた声を出す。

「クリス」

「ん？」

「人の声がする」

「え？」

「声。話し声よ。男の人と女の人みたい」

「こんなところで？」

しかもこんな時間に。

自分たちのことは棚に上げて、クリスはシルフィに導かれるまま、慎重に歩を進めていった。

いまさらいったところで仕方ない、と彼女も分かってはいるのだらう。

しかしそれでも口にせずにはいられないようだった。

「全く。なんで私がこんな……」

ぶつぶついいながらも、少しでも快適に眠れるように、木切れや小石を取り除いて、できるだけ地面を平らにしようとしている。

そうしながらも、ぶつぶつ言うのはやめない。

「まさか野宿する羽目になるなんて。思ってもみなかったわよ」

「よかったじゃないか。いい経験が出来て」

傍らで火を起こすことに専念していた男が、穏やかにそう言った。

彼女はそれが気に食わなかったらしい。

「よくないわよ。」

だいたいなんでこんなことになってると思うの」

「さあ。分からんな」

「あんたのせいよ！」

手を休めることなく、やはり穏やかに応じる男に、女は勢いよく叫び返した。

それでも男の穏やかな態度は変わらない。

あっさりと彼女の言葉を認める。

「確かにそうだな。俺も悪い。だがお前はとうなんだ」  
「え？」

「お前に落ち度はなかったのか」

「そ、それは……」

一転、彼女の態度が弱々しいものになる。

咎めるふうもなく、男は非難の言葉を口にする。

「いかな。責任逃れは」

女は何も言い返せない。

それが悔しいのであろうか。

何かを必死に考えている様子であったが、その何かが閃いたと見えて

「そもそもデューンが悪いんじゃないの？」

私たちのこんな仕事押し付けてさ」

「なら断ればよかっただろう」

「そんなことしたら報酬がもらえないでしょう」

「それは当然だな」

「お金がないと、遊ぶことも食べることも出来ないのよ」

「それも当然だな。働かざるもの食うべからず、だ」

だから彼はこの仕事を引き受けた。

それで数ヶ月は遊んで暮らせる報酬が手に入る。

その金で彼は数ヶ月遊んで暮らす予定だし、金がなくなれば、また危険と隣り合わせ（とは限らないが、そうなる可能性大）の仕事を引き受ける。

そしてまた報酬を得、遊んで暮らす。

確かに先の保証のない生活だ。

毎日を地道に働いて収入を得るほうが、生活は安定している。

しかし彼はそんな生き方を選ばなかった。

性に合わない、というしかない。

だがそんな現状に、彼は満足している。

今。というこの時を居心地のよいものと感じている。

それは彼女とて同じだろう。

そうでなければ何年もの間、パートナーとして傍らには立っていない。

それでも仕事が終われば文句ばかり言うのは、達成感と安堵感からだろう。

癖なのだ。

彼女にとって、儀式みたいなものだ。



## その4

「やめた。不毛だわ」

「気付くのが遅いな。相変わらず」

女は何か言い返そうとして口を開く。

だが結局言葉は出ずにため息をつく。

「はあああ。ホント、あんたって男は――」

「何だ」

「一言多い」

「すまん」

まるで気にしたふうもなく穏やかに言う男に、再びため息をつこうとして、突然背後からかけられた声に、女はかわいい悲鳴を上げていた。

「こんばんは」

「きゃっ」

と同時に横っ飛びに飛びすさって、ベルトに挿していた短刀を引き抜き、切っ先を闖入者に向ける。

そこで、彼女の体が固まった。

「こんばんは。」

あなたたちも野宿？ 私たちもなんだ。よかったら一緒にしない？」

女の驚きようにはまるで頓着せずにそう言う闖入者を、彼女はただ目を見開いて見つめるばかりだ。

目の前にいるそれは彼女がはじめて見る生物だった。

信じられないが、そこにいるのはちいさな女の子だった。

小さな女の子、といっても幼女というわけではない。

外見は、十二・三歳の女の子だ。

しかも宙に浮いている。

その不思議な生物から目を離せない。

ナイフをむけたまま固まってしまっている。

それは男のほうとて同じだった。

しかし彼にはこの小人に対するかすかな知識——というよりもろ覚えの記憶があった。

「妖精……か？」

彼の呟きを女が繰り返している。

「ようせい……」

「聞いたことがある。人間と同じ姿をした小さな種族がかつていた、と。」

しかしそれはもう百年以上も前に滅んだとも聞いたが……」

「何ぶつぶつ言ってるの」

困惑顔の男に向けられた声はもちろん、その原因となっている妖精のものだ。

男は注意深く妖精を見返した。

その視線を受けて妖精は言った。

「ちよつと。」

そんなに人のことじろじろ見るもんじゃないわよ。失礼でしょ。

ま、気持ちとは分らないでもないけどね。私ってば超かわいいから」

二人の人間は言葉を失った。

その表情は驚きから呆れ顔になっている。

男の表情がにゅと緩んだ。

押し殺した笑い声を洩らす。

「レッド……」

女は妖精から視線を外さないまま男の名を呟き

「ちよつと。何笑ってるのよ」

妖精は唇を尖らせて、男を睨みつける。

「すまない」

レッドは微笑を浮かべたまま、妖精に謝罪した。

「妖精が滅んだなんて嘘だな、と思ってな。」

こんなに元気のいい生物が早々いなくなるわけではない、とな」  
実際目の前にいる妖精は答える。

「そうよ。」

私たちは滅んだわけじゃないわ。ただ消えただけ。  
人間たちの前からね」

「じゃあなんで……」

ここにいるのか。

思わず漏れた女の呟きに、妖精は答える。

しかし一転して歯切れが悪い。

「それはまあ……」

ももごと口の中で何か言っていたかと思うと、なぜか顔を赤くして一気にまくし立てた。

「つまり！人にはそれぞれ事情があるってことよ」

もちろん何のことやら分からないが、女はとりあえず納得することにした。

レッドの方はというと

「ははははははは」

笑い出した。

「面白いやつだな、お前。」

妖精とはみんなお前みたいに面白いやつばかりなのか。

だとすれば残念だな、人間たちの前から姿を消したというのは」  
笑い収めると

「お前、名はなんという」

妖精はむすつとした様子で答える。

「お前お前って気安いわね。」

初対面の相手に対して失礼でしょ。

それに人に名を尋ねる前に、自分が名乗るものでしょ」

「すまない」

男は小さな姿に頭を下げ、素直に名乗る。

「俺はレッド・テッド。」

レッドと呼んでくれていい」

「私はシルフィ・シルフィーナ。」

シルフィって呼んで！」

どこか笑いを含んだレッドに応じたシルフィの声は、あからさまに怒気を含んでいて、しかしレッドに気にしたふうはまるでなく、それどころか、場違いに感慨深い声を出す。

「今夜は記念すべき夜になったな」

不機嫌極まりない様子でありながらも、無視を決め込むという選択肢はないのか、とがった声ではあるが、シルフィはレッドに問い返していた。

「なんで？」

「もちろんお前と出会えたからさ。シルフィ」

レッドとシルフィのやり取りに口を挟むことなく、半ば呆れながら半ば面白がって二人のやり取りを聞いていた女だったが、レッドの言葉には鳥肌が立った。

恐ろしくうわつついた台詞。

歯が浮く、というやつである。

シルフィのほうも、レッドの台詞に全身をむず痒くしていたが、頬を赤らめ、まんざらでもないようにも見える。

そんな妖精に意外さを感じ、そして無理もないか、と思う。

面と向かってあんな恥ずかしい台詞を吐かれては、誰だって赤くなるだろう。

妖精といえど、女の子、ということだ。

そして改めてレッドを見る。

妖精といえど女の子には違いないシルフィ。

まさか彼女を口説くつもりではなからうな。

疑いのまなざしを向ける女の耳がぐいと引っ張られた。

「ね、あなたは？」

妖精が覗き込んでいた。

「え？」

女はただ面食らう。

「名前よ。あなたの名前」

「あ、ハルカ。ハルカ・エア」

乞われるままにハルカは答えていた。

「じゃ、ハルカね」

シルフィは彼女をそう呼ぶことに決めると

「じゃ、レッド。ハルカ。私たちは今から友達ね」

無邪気にそう言った。

先ほどもでレッドに対していたときの機嫌の悪さはもうない。

確かにシルフィは無邪気なのだ。

無邪気ゆえに気に入らないことがあればすぐ怒るし、きつかけさえあれば機嫌もすぐに直る。

それに性格的にいつまでも怒ってはいられないのだろう。  
疲れるから。

## その5

「妖精と友達になれるとは光栄だな」

言葉だけ聞けば、彼もまた無邪気なのかと思ってしまいがちだが、レッドがそんな素直な男でないことを、ハルカは知っている。

しかし彼の言葉に対しては同感なので、彼女は頷いた。

「そうね」

二人の反応に満足そうに頷いて、シルフィは続ける。

「私たち友達だからさ。もし二人が盗賊の人でも、悪さしようなんてしないよね。友達なんだから」

レッドとハルカは顔を見合わせた。

妖精らしからぬ———というかシルフィらしからぬ用心深さだと思ったのだ。

くすりと微笑をかわしたあと、レッドが答えた。

「もちろんだ、シルフィ。いくらなんでもそこまで性根は腐っていない。

それにそもそも俺たちは賊なんかじゃない。ちょっとした事情のある、旅人さ」

「うん、そうだよ。分かってたけどさ」

シルフィに言葉に、レッドとハルカはまた顔を見合わせた。

不審げな二人に構うことなく、シルフィは背後の森の暗がりに声を放つ。

「クリスう。平気だよ。この人たち大丈夫う」

つられて二人は森の暗がりの目をやる。

木立の影から、そろそろと一人の少年が姿を見せた。

「こ、こんばんは」

消え入りそうな声で少年は言った。

「はははははは」

レッドが突然はじかれたように笑い出した。

ハルカもくすくすと笑い声を洩らしている。

ひとしきり笑った後レッドは

「なかなか愉快なやつのような。シルフィ、お前の連れは」

それから顔を赤くして固まっているクリスに声をかける。

「おい、少年。そんなところにいないでこっちに来たらどうだ」

「は、はい」

クリスはレッドたちには届かないだろうちいさな声で答え、ゆっくりと彼らのもとに歩いていく。

及び腰な様子に、レッドは笑いを含んだ声を重ねる。

「そんなにびくびくする必要はない。大丈夫だ。誰もとって食おうというわけじゃない。

俺たちは友達なんだから」

「え？」

「ん？ 違うのか？ お前、シルフィの連れだろう。だったら俺たちは友達だ。違うか？」

「は、はい」

と答えたものの、クリスの慎重な足取りは変わらない。

レッドもさらに急かすような事はしなかった。

クリスがやつのことで側まで来るとレッドは一言。

「座れ」

クリスはおとなしく従った。その肩にすかさずシルフィが腰を下ろす。

どこか怯えた様子のクリス。

レッドの態度を威圧的に感じているのかもしれない。

「どうした、少年。緊張しているのか？」

しかし塔のレッドはそのことに全く気付いていないようだ。

「レッド」

ハルカはそんなレッドを一言たしなめてから、クリスに優しく声をかけた。

「ねえ、君、名前は？」

体を硬くしてうつむいていたクリスは、その声に顔を上げる。

「あ、クリスです。クリス・バード」

ハルカは、クリスのあわてる様子に微笑しながら

「じゃあ、君のこと、クリス君、て呼んでいいかな」

「あ、はい。いいです。えと……」

「ハルカよ。ハルカ・エア。ハルカでいいわ」

「はい。ハルカさん」

はにかんでハルカの名を口にするクリス。

もし今ここにレッドとシルフィがいなければ、ハルカは少年のあまりの可愛らしさに、きつと彼を抱きしめていたことだろう。

その衝動は何とか堪えたが、だらしく笑みが漏れてしまうのは仕方がない。

笑顔を向けられ、真っ赤になってうつむくクリス。

ハルカはそれにもまた微笑する。

少年の一挙一投手が、ハルカを危険な気分にならせてしまう。

女の勘でか妖精の勘でか、シルフィはそれを感じ取り、頬をぷうと膨らませハルカを睨みつけている。

「ところで少年」

こちらにもまた男の勘で、剣呑な気配を察したのか、二人の間に割り込むように声をかけた。

「こんな夜にこんな森の中で何をしているんだ。子供が出歩いてもいい場所でも時間でもないぞ」

それはレッドたちにも言えた。

大人でもこんな時間にこんな場所を出歩かない。

それをするものは不審者以外にないだろう。

だからこそクリスは二人を善からぬ類の人間と疑い、シルフィを偵察に行かせたのだ。

それはともかく、クリスはレッドの問いに答える。

「あの、しきたりなんです。十三歳になると旅に出なくちゃならなくて。だから今ここにいるわけで。」



でも予定では日が暮れるまでには街道に出て、宿を取っていたはずなんです。

今頃はそこでゆっくりしていたはずで。でもシルフィが……」  
ため息をつくクリス。

もちろんシルフィは黙っていない。

「ちょっと。なんでそこで私が出てくるのよ」

「だってそうだろ。シルフィがのんびりしてるからこんな事になったんじゃないか」

「のんびりして何が悪いのよ」

「いろいろと予定を立ててたのに全部無駄になったじゃないか」

「嘘ばかり。何も考えてなかったくせに。無計画まっしぐらのくせに」

「何だよ、それは……。そもそもシルフィだってはじめ言ってたじゃないか。」

今日中に街道に出ようって。それが結局こんなになって……。

無計画はシルフィじゃないか」

「いいじゃないの、そんなの。それに予定は未定、と言うでしょ。知らないの？」

「知らないよ!」

無知ねえ。と妖精が鼻で笑う。

少年は泣き出さんばかりに興奮している。

仲裁に入っただのはハルカだ。

「まあまあ、二人とも。もうその辺にしておきましょうよ。」

それに私はクリス君たちが予定通りにいかなくてよかったと思ってるしね」

「……どうしてですか」

「そのおかげで私たちは出会えたんだし、ね」

微笑むハルカ。

その笑顔にクリスは耳まで真っ赤になる。

「は、はい。そうですね」

ハルカの顔をまともに見られず、うつむいてしまうクリス。

## その6

そんな彼が「いたっ」と小さな悲鳴を上げ顔を上げたのは、シルフィに真っ赤な耳を引っ張られたからだ。

「何するんだよっ！」

「でれでれしないの！」

強く抗議の声を上げたクリスだが、シルフィにそう言われ、途端に語調が弱くなる。

「でれでれなんかしてないだろ」

「してたわよ。みっともないぐらい鼻の下伸ばして」

クリスはあわてて顔の下半分を手で覆った。

そんなクリスは放っておいて、シルフィは今度はハルカを見据える。

「それにハルカも。クリスを誘惑するのはやめて頂戴」

「誘惑なんて……」

あからさまな言葉にハルカはどもる。

その気がまるでなかったとは言い切れないからだ。しかし

「まったく。いい年してみっともない」

と言われている下手に回ってばかりもいられない。

「それってどういう意味かしら」

「決まってるでしょ。親子ほども歳の離れた男の子を誘惑するなんてみっともないってことよ」

「そんなに離れてません！」

叫び返すハルカを「むきになるところが怪しい」とでも言いたげな顔でシルフィは見返す。

疑いを晴らすべく、ハルカはクリスに問うた。必死だった。

「クリス君、君、十三歳って言ったわよね」

「あ、はい」

「ほら」

と今度は勝ち誇ってシルフィを見る。

「十歳しか離れてないじゃない」

「十歳も、よ。十歳も離れてれば十分、みっともないわ」

シルフィはふわりとクリスの肩から飛び上がると、ハルカの鼻先に指を突きつけて駄目押しをした。

「みっともない」

絶句して、しかしハルカはすぐに切り返す。

「みっともない！　かわいい男の子に声をかけるのは女として当然です」

「それがハルカの理屈なわけね。変な理屈よね。つまりハルカは、変！」

「変じゃない！」

果てしなく続きそうな口論に、クリスはため息をつく。

「クリス」

「あ、はい」

がレッドには、特に気にしたふうはなかった。

「お前たち、とりあえずはどこを目指しているんだ」  
きよとんとレッドを見返すクリス。

「とりあえずの目的地だ。旅と言うからには行き先があるだろう」

「いえ、特には……」

「決まっていないのか」

「はい……」

「とりあえず街道に出る。それしか考えていなかったか」

「はい……。すみません」

「――まあ、確かに風まかせ足任せというのもひとつの手ではあるが、旅なれた者でないとできん芸当だろう」

「はい……」

クリスはただうなだれるばかり。そんなクリスをじっと見つめた後、レッドは言った。

「どうだ、クリス。俺たちと一緒に来ないか」

突然の提案にクリスはすぐには答えられない。

「特に行き先を決めていなかったと言うことは、別にどこでもいいという事だろう。なら問題は何かもないな？」

レッドにそう迫られ、クリスは思わず頷いてしまう。

「は、はい」

「よし。決まりだ」

レッドはそう言うのと、クリスの肩に手を置き、にっと笑った。

クリスも、ぎこちないながらも笑顔を返した。

シルフィとハルカはまだ口論している。

\*\*\*

レッドの提案は、クリスにとってありがたいものだった。小さなあの村からほとんど出た事のないクリスにとって、外の世界は文字通り未知の領域だったからだ。

一人ではないとはいえ、連れがシルフィだけでは心細い。

レッドとハルカと一緒に来てくれることは、本当に心強い。

それに二人とも旅慣れている様子。

いや、それはよく知らないが、二人とも大人には違いない。

二人から学ぶことは、大いにあるだろう。

知識ばかりではなく、その他にもいろいろと。

つまりクリスには反対する理由がまるでないのである。

問題はシルフィだ。

レッドが、「自分たちも同行する」と申し出たとき（正確にはクリスたちがレッドたちに同行する）、シルフィはかなりごねた。

レッドはともかく、ハルカと一緒になのが気に入らなかったらしい。事あるごとに、ハルカに食って掛かっていた。

しかし街道に出、人の大勢行き交う場所に出れば、物珍しさに辺りをきよろきよろするのに忙しく、その頻度はかなり減っていた。

それでもやはり問題はシルフィである。

シルフィは妖精だ。

森と風の妖精（自称）だ。

妖精という生き者は、すでに世界から居場所をなくした存在だ。百年以上も前に絶滅した存在。

レッドのように、それを知っているのは稀有で、ほとんどの人が、妖精は御伽噺の中でしか存在しない生き物だと思っている。

羽を生やした小人が実在したとは思っていないのだ。

妖精、という存在そのものはあまりにも有名なのに。

そんな御伽噺の住人が、今現実にも目の前にいる。

威丈夫と美女の間に挟まれた線の薄い少年の肩に止まっていたかと思うと、ふわりと浮き上がり、あっちに飛びこっちに飛び、なにやら騒がしくしている。

少年がそんな妖精を叱り付けている。

仕方なく、といったふに妖精は少年の元に戻り、肩に腰掛ける。

道行く人々はそんな四人連れ？に目をやらないわけにはいかず、立ち止まってはぽかんと彼らを見、しかしその視線は妖精に釘付けで、そばに連れがいればひそひそと声をかわし、飛び立つ妖精を見ては口をあぐりとあけて、不思議なその生物を指差す。

だからクリスたちが街道に出ると、彼ら四人連れ？の噂は瞬間に広まった。

もちろんこうなることを、レッドとハルカは予想していた。

人の話題に上り騒がれることになるだろうと。

だからハルカは最初、いらぬ面倒はごめんだと、少なくとも人がいるところでは、シルフィを鞆にでも入れて姿を隠させようと提案した。

それに猛反発したのはもちろんシルフィだ。

ハルカは譲らなかった。

意見のぶつかり合いが、ただの罵り合いに変わったところでレッドが仲裁に入った。

ハルカの言うことももつともだ。しかしシルフィにずっと姿を隠しておけとは言えないし、実際それは不可能だ。だったら最初から堂

々としていたほうがよい。下手な小細工はしないがいい。いづれ無理が出ることは決まっているのだから。

クリスもレッドの意見に賛成だった。

正直言って、何故それほどハルカが気をもむのか分からなかった。

クリスにとってシルフィはそばにいて当たり前前の存在だったからだ。彼女とは物心ついたときから一緒にいる。

確かにレッドとハルカの反応でシルフィが、つまりは妖精が物珍しい存在なのだということは分かったが、二人はすぐにシルフィを受け入れ、打ち解けてくれたではないか。

賛成多数で、シルフィのことについては特に気を使わない、ということになり、結果としてハルカの予想通り人々の耳目を集めることになった。

それはともかく、四人連れ？は街道に出て二日目に、目的地であるロゴス神王国の主都ロゴスに着いた。

レッドとハルカは戻って来たわけわけなのだが、当然クリスとシルフィは始めて首都の地を踏んだことになる。

これまでの道のりで、旅行者や宿場の賑わいなどで十分に人の多さやその喧騒に驚いたはずだった。

しかしここでの人の多さとは比べ物にならない。

腕を伸ばせば必ず誰かに触れる。

ここにいる皆が皆腕を伸ばし合えば、途切れることのない人の輪が出来るのではないかと思えた。

さらに驚いたのは町の門である。

巨人のためのそれであるかのような、巨大な、石造りのアーチ型の門。

歩くことも忘れてぽかんと口を開けたただ見上げるばかりのクリスと、クリスの肩に腰掛けてこれもまたぽかんと口を開けて見上げているシルフィに、ハルカはこの巨大な門は凱旋門というのだと教えた。その門よりは低く、町をぐるりと囲むほどに広大な石造りの壁は、その昔、この大陸で、たくさんの国が争い合っていた時代の名残だ

とも教えた。

その時代には閉ざされていることが常だったという門をくぐり、クリスたちは町の中に入った。

門を抜けると街道よりも広い大通りがまっすぐに伸びていた。

100mほど先で十字路になっていて、そのあと等間隔で十字路が続いている。

俯瞰すれば、碁盤の目のような町の作りが分かっただろう。

むろんクリスが鳥の目を持ち得るわけはなく、相変わらずの人の多さと賑わいに圧倒されていた。

クリスたちを促がし、レッドに続いていくハルカに、クリスはふらふらとついていった。

レッドは門の脇に向かって歩いていく。

そこには幾台もの馬車が止まっていた。

レッドはそのうちの一台に近づいて、御者となにやら言葉を交わす。御者が大きく頷いた。

「ああ。じゃあ、『おかみさんの店』まで頼む。三人だ」

「毎度！」

威勢のいい声を上げると、御者は御者台を降り馬車の扉を開ける。

レッドがまず乗り込みそれからハルカに促がされてクリスが乗り込む。

その際、御者の目にはクリスの肩に止まっているシルフィの姿が当然映っただろうが、彼が気に留めたのはそのことではなく、クリスの呟きのほうだった。

おそらく念押しに行き先を確認されたと思ったのだろう。

「『おかみさんの店』？」

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。ちゃんと分かっています。他の何を知らなくても『おかみさんの店』を知っていなくちゃあ、馬車乗りは勤まりません」

むろんクリスには何のことやら分からない。

彼はきよとした顔のまま、レッドのかたわらに腰掛け、続いて



乗り込んだハルカがその隣に座る。

御者はそれを確認すると再び御者台につき、手綱を一振りする。  
馬車がゆっくりと動き出す。

## その7

外観は普通の民家と変わらなかった。

玄関脇に立て看板があり、そこに『おかみさんの店』と黒々と書かれていなければ、決してここがその場所だとはわからないだろう。

四人？は馬車から降り、レッドが料金を払うと、「またのご利用を！」御者の威勢のいい声を残して馬車は去っていく。

四人？は『おかみさんの店』の玄関をくぐった。

中に入ると印象はずいぶん違っていた。

十組ほどの椅子とテーブルがある。

そのほとんどがもう客で埋まっていた。

彼ら彼女らが口々から漏らす声で、店内は喧騒で溢れていた。

右手奥には暖簾で仕切られたスペースがあるようで、そこから女給が出たり入ったり忙しくしている。

それになにやらよい香りが漂ってくる。

厨房のようだった。

今しがたそこから出てきた女給に、ハルカが大きく声をかけた。

「ナタリー！」

声に振り向いた女給は一瞬驚いた表情を見せ、それから満面に笑みを浮かべる。

しかし仕事中だということを思い出してか『待ってて』唇をそう動かして料理を運んでいく。

その口元には笑みが残っている。

別な女給に案内され四人？がテーブルにつくと、一人の男がよろよろと近づいてきた。

夕方前だというのに、もうかなり酔っているようだった。

男は倒れ付すようにテーブルに手をつく、赤い顔をクリスに向ける。

「ようよう、僕ちゃん」

酒臭い息にクリスは鼻を覆う。

「いい年して人形遊びかい。あまり感心しないねえ。

しかしよく出来てるねえ。生きてるみたいだ」

そう言っつて男はクリスの肩に止まっている小さな女の子に顔を近づける。

しかしどうしたとか、シルフィはまるで微動だにしない。

本当の人形のようにじっとしている。

クリスがそのことを不思議に思っていると

「わ！」

耳元で大きな声がして

「ひゃああああ！」

情けない悲鳴を上げて男が身を仰け反らして倒れこんだ。

まじまじと覗き込んでくる男に、突然顔を向けたシルフィが大声を上げたのである。

それに男は肝をつぶしてひっくり返ったわけだ。

なるほど、だからシルフィは大人しかったわけだ。

男を驚かすタイミングを計っていたわけだ。

納得がいつてクリスはため息をついた。

当のシルフィはクリスの肩から離れると、ふわふわ浮きながら手足を叩いて喜んでいる。

「あははははは。」「ひゃああああ！」だって。おっかしい」

レッドもハルカもつられて笑っている。

クリスはため息。

店内にあるすべての視線は、宙に浮いているシルフィに釘付けだ。

「ハルカツ、それ！」

その中で大きな声をあげたのは、ハルかに「ナタリー」と呼ばれた女給だった。

ナタリーは「それ」を指差している。

「それ」とは無論シルフィのことだ。

「それ」呼ばわりされて、指を指されて、当然のことながらむっと

している。

罵声を浴びせようとして

「ただいま」

しかし聞こえた声はシルフィのものではなかった。  
シルフィは拍子抜けした声のしたほうを見やった。

それは他の皆も同じで、皆玄関に顔を向けている。

そこには年のころ17、8の少女が鞆を持って立っていた。

透き通るような肌の白さと瞳の青さが目を引いた。

みな視線を受けても彼女にはまるでひるんだ様子はなく、平静とあまり変わらない。

それでも『何?』と問いたげな表情ではある。

「お帰り、ラス」

そんな少女に声をかけたのはあの女給——ナタリーだった。

「ただいま。姉さん」

ラスはナタリーに言葉を返し、それから

「どうしたの?」

姉にともなく問う。

そう聞かれてもうまく答えられないナタリーは苦笑を浮かべる。

客たちもそうだ。

その中で苦笑を浮かべていないのは、レッド、ハルカ、クリス、シ

ルフィだけ。

ラスの視線がふいと動いてその四人を見つけた。

得心がいったように

「ふうん」

と呟き

「珍しいお客様ね」

そういつて笑った。

それはとても小さな笑いだったが、見るものの心に焼きつくような、  
そんな笑いだった。

しかし微笑みを残したあとには、もう四人?から興味をなくしたよ

うに、またもとの表情にもどり（はつきりいえば無表情）、店の奥へと向かう。

ナタリーのそばを通ったとき「姉さん、仕事」一言注意し（ナタリーは「あ、はい」と答えた）、厨房の奥に向かって「母さん。私もすぐに手伝うから」と声をかけ（厨房からは「一息ついてからでいいよ」と声が返ってくる）、さらに店の奥にある階段を上っていった。

いつの間にか店にはざわめきが戻っている。

シルフィに驚いてひっくり返っていた男も、いつの間にか元いた席に戻り酒を飲んでいた。

もう誰もシルフィに奇異の目を向けているものはいない。

皆さん、かなりの順応性の高さを持っているようだった。

自分に集まっていた注目がきれいになくなってしまつて、シルフィは不機嫌極まりない。

原因はあの少女。

ラスと呼ばれた少女。

彼女がシルフィを見てもまったく驚かなかつたから、きっと皆もそんなに驚くほどのことでもないと悟つてしまったのだろう。

「まったくもう……。なんなのよ、あの娘は」

それが面白くなって、シルフィはぶつぶつもらす。

あの少女が消えた店の奥を思わず睨んでしまう。

クリスもまたシルフィと同じ場所に目を向けていた。

しかしシルフィと違いその表情はどこかゆるんでいる。

夢の中にいるような顔だった。

ぼうつとしたまま、レッド、ハルカ、どちらともになく、クリスは尋ねていた。

「あの子、誰なんですか？」

「ラス・メイ。ここの娘だ」

「ラス・メイ……」

クリスは今始めて聞いたその名を呟いてみる。

何かが胸の奥にすんと落ちた気がした。

ラス・メイ……。ラス・メイ……。ラス・メイ……。いつまでも呟いていたい響きが、その名にはあった。

「どうしたの、クリス君」

「いえ、なんでもないです――」

クリスは上の空。

そんなクリスにハルカは微笑む。

「もしかして恋しちゃった？」

クリスは耳まで真っ赤になる。

「ホントなの？！」

叫んでシルフィは激しく詰め寄る。

「僕にも分からないよ。こんな気持ち、初めてなんだから」

「なるほど、初恋か」

ハルカの言葉にクリスはまた真っ赤になる。

それを見てシルフィもまた叫ぶ。

「この浮気もの！ 私というものがあらなら！」

小さな足でクリスの顔を蹴る。

痛い、痛いよ。抗議しているとクリスの頭上から声がふってきた。

「ラスに恋したって？ 少年。苦労するよ。あの子、そういうところ

は鈍いから」

見上げると一人の女給が立っていた。

「はじめまして。少年、妖精さん。久しぶり。レッド、ハルカ」

「ああ」

「久しぶり。ナタリー」

三人は知り合いらしい。

そういえば店に入ってすぐにハルカがこの女給に声をかけていたのだった。

「でもホント久しぶりよねえ。一月ぶりくらいじゃない？」

「もうそんなになる？」

「なるわよお。」

仕事大変なんだねえ」

「うん、まあ、そうね」

「でも一言くらいは言っておいて欲しかったなあ。」「行ってきます」とかね。全然店にこないから、ああまたかあ、と思ったけどねえ」

「ああ、うん、ごめん。段取り悪くてさ」

「それにしたって薄情じゃない」

「まあ、何というか、いつものことだから」

「やっぱり薄情ねえ。そんなじゃあ友達なくすよお」

「でもナタリーは友達でいてくれるんだよね」

「まあ、そうだけど。でも人の厚意に甘えてばかりでもいけないと思うのよねえ」

「ごめん」

「レッドにも言えることよ。」「俺は関係ない」みたいな顔してるけど」

「え？ レッドからも何も聞いてなかったの？」

「うん」

「どうしようもない男ね。相変わらず。一言くらいあってしかるべきでしように。恋人なんだから」

「そうよねえ。それでも待ってる私っていい女よねえ？ 感謝してよ、レッド。こんないい女、他にいないわよお」

「そうだな」

レッドが声を返すとは思っていなかったのだろう。

ナタリーは口をぽかんと開けて言葉をなくし、うつむいた。うつむいたナタリーの頬はほんのり赤い。

ゆるむ頬で思わず笑みが漏れる。

「ふふ」

「はいはい、ご馳走様」

げんなりした様子でハルカが呟く。

すぐにいつもの調子を取り戻すと

「クリスマス君。彼女はナタリー・メイ。ラスのお姉さんよ」

「は、はじめまして」

「ナタリー。この子はクリス・バード君。ラスに恋しちゃった少年」  
「ハルカさんっ」

真っ赤になるクリスに、ハルカは意地悪く聞く。

「えー、違うのお？」

「だから、それは……。だって、こんな気持ち初めてだから……」  
「なるほど。初恋か」

クリスはまた真っ赤になる。

「ナタリーさんまで……」

「でも、そうなんだよ、少年。その証拠に――」  
言葉を切ると、ナタリーはクリスの肩越しを見やった。

「あ、ラス。ちょっとこっちに来て」

途端にクリスの顔は、火の出そうなほどに真っ赤になる。

「嘘だよ」

そんなクリスにナタリーの声。

固まっていた少年は思わず聞き返す。

「え？」

「嘘。ラスはいないよ。今頃は自分の部屋でゆっくりしてるんじゃないかなあ」

「え？」

「でも分かったでしょう、自分の気持ち。そういう気持ちを「好き」  
って言うのよ」



## その8

確かにクリスがラスに抱いている感情が、何か特別もので、それは「好き」という感情なのかもしれないが、からかわれた挙句にうまく言いくるめられたようで、少しばかり面白くなかった。

だからナタリーに向けられた目は、いささかきつい。しかしナタリーに気にしたふうはない。

「それでね、ナタリー。お願いがあるんだけど」  
「何？」

「クリス君のこと、ラスに紹介してあげて欲しいの」  
「え？」

と声を上げたのはクリスだ。

「ん？ 何、嫌なの？」  
ハルカは意地が悪い。

「いえ、そんなことは、ありませんけど……」  
ももごもと小さく答えるクリスの頬にシルフィが蹴りを入れる。

「この女好き！」

「痛いな、もう。さっきからなんだよ」  
頬を押さえながらぶつぶつ文句を言うクリス。  
くすくすと笑いながらナタリーは答えた。

「いいよ、別に」

クリスの顔がぱっと輝いた。

シルフィが叫ぶ。

「クリスのバカあ」

「だめだよ、クリス君。女の子泣かしちゃあ」  
笑いながらナタリーは立ち上がる。

サボりの時間を終えて、仕事に戻ろうとする彼女にレッドが声をかけた。

「ナタリー。俺からも頼みがあるんだが」

「何？」

レッドの頼み事などめったにない。ナタリーの声は弾んでいた。

「クリスをここで雇ってもらえないだろうか。出来れば住み込みで驚くクリス。さらに驚いたのはナタリーがあっさり頷いたからだ。」

「いいよ、別に。母さんに聞いてみてからだけど」

「頼む。おかみさんには俺からもあとで話すから」

「うん」

そしてナタリーは仕事に戻っていった。

「レッドさん……」

クリスが続けるより先にレッドは言った。

「気にするな。ついでだ」

「でも……」

「気にする必要はないわよ、クリス君。レッドがああ言ってるんだからね。それに人の厚意は素直に受け取るものよ」

手のひらで頭を二度叩かれる。ハルカの手の暖かさが体にすうっとしみこんでいくようだった。

客が引けた『おかみさんの店』では四人？が遅い夕食をとっていた。この店の女主人マリエ・メイと、その娘のラス・メイ、そしてクリスとシルフィである。

レッドの頼みをマリエは二つ返事でOKしたので、クリスはここで住まうことになった。

だからこれは自己紹介やら何やらを兼ねた夕食会である。

まずはマリエが自己紹介。

「クリス——君の事はそう呼ばせてもらおうよ。住み込みで働いてもらうとなれば家族も同然だからね。いらぬ気は使いたくないし。そこら辺は覚悟してもらおうよ。びしびしごくからね」

「は、はい」

身を硬くするクリスにマリエは笑う。

「あははは。そんなに心配しなさんな。ほどほどにしておくから」それから改めて自己紹介。

「マリエ・メイだよ。この店の主人、てことになるかね。よろしく頼むよ。クリス」

「よろしく願います」

頭を下げるクリスをニコニコ見ながら

「次はあんたの番だよ」

娘を促がす。

「ラス・メイ。よろしく」

彼女の自己紹介は終わった。

「それだけかい？」

マリエの念押しにもラスはただ頷くだけ。

「うん」

「あはははは」

途端にマリエは笑い出す。

「相変わらずだね、この子は。こんなときくらいもう少し愛想よくしな。第一印象ってのは大事なんだからさ」

クリスをちらりと見やり

「ま、その必要はないようだけどね」

からかわれてクリスは赤くなる。

クリスの肩でシルフィは頬を膨らませそっぽを向いている。

二人の対照的な様子に「あははは」と笑ったあと

「さあ、今度は二人の番だよ。いまさらと思うかもしれないけど、お願いするよ」

「はい」

クリスは頷いて

「クリス・バードです。雇ってもらって本当にありがとうございます。よろしく願います」

緊張した中にも、うまく挨拶できたことへの安堵が表情に出ている。しかしすぐにそれが怪訝なものに変わる。

続くはずの声が聞こえなかったからだ。

クリスは肩を揺らしてシルフィを促がした。

「シルフィ・シルフィーナ！」

叩きつけるようにそう言って、沈黙。

三人は続くはずの言葉を待っていたが、妖精にその気はないようだ  
とわかると

「それだけかい？」

「そうよ！」

またも叩きつけるように答える。

呆気にとられたマリエは一瞬言葉を失って、しかしすぐに笑い出した。

「あはははは。その愛想のなさはラスといい勝負だね」

「私は「よろしく」は言ってたわ、母さん。それに怒ってもいなかったし」

ラスは静かな声で言い返した。

マリエは笑い収めると

「怒ってるのかい？」

「そうよ！」

「なぜかしら？」

問うてきたラスをシルフィはきつと睨みつけ

「決まってるでしょ！ クリスがあんたにひ——」

「わーわーわーわーわー！」

突然大声を上げたクリスにメイ母娘の視線が集まった。シルフィは  
またそっぽを向く。

「どうしたの？」

ラスの静かな声にクリスは赤くなりながらあわてて答える。

「なんでもないんです。何でも。気にしないでください。——ラス  
さん」

「そう」

小さく頷いてから、ラスは続けた。

「私のことは「ラス」でいいから。「ラスさん」なんて――」

そう呼ばれたときの気持ちを反芻するようにかすかに眉根を寄せると

「なんだかこそばゆいわ」

「でも……」

「私も君のこと「クリス」って呼ばせてもらうから」

戸惑うクリスに、ラスは一方的に宣言した。

「う、うん」

もちろん嫌じゃない。とてもうれしい。それでもぎこちなくクリスは頷いた。

「分かったよ。――ラス」

ラスは笑った。とても柔らかな微笑。一目でクリスの心を奪ったあの微笑。

あの時と同じようにクリスは耳まで真っ赤になってうつむいた。

「あはははは」

ラスにクリスにシルフィー――マリエは三人それぞれの様子を見るのが楽しくてしょうがない。

「じゃあ、みんな紹介も済んだことだしご飯にしようかね。あたしやもうおなかぺこぺこだよ」

## その9

夕食時の会話はもっぱらマリエとクリスによるものだった。

マリエがクリスに今までのいきさつ——何故一人旅をすることになったのか、レッドとハルカとはどのように知り合ったのか、ここまでの道のりは楽しかったか、どんなことが楽しかったか——を尋ね、クリスはそれに答える。

ラスもシルフィもその会話には加わらず、もくもくと食事を取っている。

（シルフィは、客としてさっきあんなに食べたはずなのに平気な顔で料理を口に行っている。クリスはお腹いっぱい、少ししか食べられなかったというのに。）

「そういえば姉さんは？」

「野暮なこと聞くねえ。レッドが帰ってきたんだ。決まってるだろう」

「そうか」

ラスは頷く。

クリスにはラスが何故納得したのか分からない。

食事を再開したラスだったが、またぼつりと言った。

「でも意外と待つ女よね、姉さんって」

「そうだねえ。ぼんぼんものを言うわりにはねえ」

「レッドのこと、本当に好きなのね、姉さん」

「そうだねえ」

相槌を打ってからマリエは続ける。

「でもどうしたんだい？　ずいぶんと今日はおしゃべりじゃないか」

「そうかしら」

とぼけるラス。

それを見て微笑むマリエ。

クリスはそんな二人を不思議そうに見ている。  
やがてまたラスがぼつりともらず。

「好き、か……。好きってよくわからない」

マリエは目を丸くし、声を上げて笑う。

「あはははは。本当にどうしたんだい、ラス。お前がそんなこと言うなんて。でも、そうだね。お前もそういうことを気にする歳になったって事だね」

ラスは何も言わない。

「好き、が分からないねえ」

マリエは少し考え込んで

「でも、そうだねえ。そうかもしれない。好き、ていうのは頭で分かる感情じゃないからねえ。体で分かる感情……。誰かを好きになっってはじめて分かる感情さ」

ラスにつられてか、マリエもいつになく饒舌だった。こんなことは普段なら喋らない。

「私もね、好きっていう感情がどんなものか知ったのは父さんにあっってからだよ。想いだけで体中が満たされる、ていうあの経験はちよっと素敵だったね。そんな経験をくれた父さんを私は愛したし、父さんも私を愛してくれた。だからお前たちがいるんだよ、ラス」

「姉さんはね。でも私は違うと思う」

「あはははは」

マリエはラスの言葉にまた笑い

「まあ、それはそうだけどね。でもお前も私の大事な娘だよ、ラス」  
「うん」

頷いたラスの唇には小さな微笑みが浮かんでいた。

「分かってる。母さん」

言葉を交わす二人をクリスは不思議そうに見つめていた。

あてがわれた二階の部屋に引き払う。

ベッドにもぐっても、クリスは興奮でなかなか寝付けなかった。  
いよいよ明日から新しい日々が始まる。

不安よりも期待が大きいのはきっとあの二人のおかげだ。  
レッドとハルカ。

二人に出会わなければ、きっとクリスはまだ見知らぬ町で心細さに泣いていたかも知れない。

何よりもラスに合うことはなかっただろう。

ラスのことを考えるといつそう胸の高鳴りが激しくなる。

クリスは顔を赤らめシーツを鼻先までかぶる。

自然と笑みがこぼれてくる。

マリエの言ったとおりだ。

確かにこれは素敵な経験だ。

想いで体中が一杯になるというのは。

ラスと出会えたことを女神様に感謝したい。

その改めてレッドとハルカにもお礼を言いたい。

二人がいなかったら今のクリスはないし、何よりラスに出会うこともなかったのだから。

二人はどこに住んでるんだろう。マリエおばさんに聞こうか。ナタリーさんに聞いたほうが早いかな。あ、そういえばナタリーさん居なかったつけ。確かおばさんはレッドが帰ってきたから、とか言ってたけど。

「ねえ、シルフィ」

クリスは宙に浮いている妖精に声をかけた。

シルフィは背中中の羽を体の前に回し重ね合わせていたのだが（その姿はまるで蛹のように見える）、羽を解くとくると半回転してクリスを見下ろす。

「何？」

「うん、あのね、ナタリーさんがいない理由。マリエおばさんは「レッドが帰ってきたから」だって言ったけど、どういう事なのかな」「そりゃ、決まってるでしょ。レッドとナタリーが恋人同士、てことよ」

「え！　そうなの？」



驚くクリスに、シルフィは呆れてため息をつく。

「ハルカもそう言ってたでしょ」

「そうか。そうなんだ」

しきりと感心するクリスに、シルフィはまたため息をつく。

「やっぱりまだ早いわよ。恋愛なんて」

「え？ 何か言った？」

「別に！」

再びシルフィは天井を向き、羽を体の前に重ね合わせた。

ふよふよ浮かんでいるシルフィを見上げながら、クリスはまたぼつりと言った。

「ねえ、シルフィ」

「何？」

シルフィは天井を向いたまま答える。

「マリエおぼさんの言ってたことなんだけど」

「マリエの言ってたこと？」

シルフィは羽を重ね合わせた格好のまま、体を回してクリスを見下ろす。

「うん。ラスのことを「お前も大事な娘だよ」て言ってたことなんだけど」

「それが？」

「どういう意味なんだろう」

「本当の親子じゃないってことでしょ」

「そうなんだ。でもなんで？」

「知らないわよ。そんなことは」

答えたあと、シルフィはにやりと笑い意地悪く続ける。

「ラスに聞いてみればいいじゃない。」「どうしてマリエと親子じゃないんですか」、て」

「そんなこと聞けないよ」

「それが分かっているんならあれこれ詮索するのはよしなさい」

「……うん」

クリスが頷くのを待たず、シルフィは再び天井を向いた。

目をつむり眠りに入っというとしたとき、またクリスが声をかけ  
てきた。

「ねえ、シルフィ」

「何？」

目は閉じたまま答える。

「お母さん、てあんな感じなのかな」

「あんな感じ？」

「マリエおばさんみたいに、あったかくて、大きくて、そんな感じ」

「さあね。知らない」

シルフィは素っ気無く答える。

「いいからもう寝なさい」

「うん」

クリスは素直に頷いて

「お休み、シルフィ」

「お休み、クリス」

## その10

ナタリーが帰ってきたのはずいぶんと日も高くなったころだった。自分も客であるかのように何食わぬ顔で店に入ってきた。

多少の危なっかしさを伴いながらも、てきぱきと仕事をしているクリスを見つけると

「おお、やっとなるな。少年」

「お帰りなさい。ナタリーさん」

挨拶を返しながらも、クリスは仕事の手を止めない。

「うん。感心感心」

頷くナタリーに向かって、怒声が飛んできた。

「何が「感心感心」だい。バカやってないでお前もさっさと働くんだよ。でなきやくびだよ」

それは困るなあ、などとぼやきながら、ナタリーは店の奥に引っ込む。

制服で現れると、遅まきながら仕事に取り掛かる。

客足も減り一段落したので、ナタリーとクリス（とシルフィ）は店の奥で小休止をとっている。

なぜかもしもじとして、ナタリーの様子を窺っているクリス。

何か尋ねたい様子でいるが、ナタリーは知らんふりをする。

「おそろいだね。制服」

ナタリーが言ったのはそのこと。

クリスは困ったように笑う。

「僕はいやだって言っただけですけど、みんなが着ろ着ろって」

「いいじゃない、似合ってるんだから。かわいいよ」

クリスは苦笑するしかない。

クリスはナタリーとおそろいの制服を着ている。

つまりは女物だ。

スカートなのだ。

さすがにスカートの下には自前のズボンをはいているが、やはり抵抗はあった。

その制服姿が、従業員のお姉さま方には大変好評で（ズボンをはいたときには溜息をつかれたが）、お客さんたちにも受けが良かった。もちろんクリスの心中は複雑だった。

「うん。かわいいかわいい」

ナタリーにそう言われても困ってしまうのだ。

素直に喜べないし、だからといって怒るほどでもない。

苦笑するしかなかった。

もちろんナタリーは、クリスの気持ちは承知の上で少年をからかっているのであるが。

だがそれが少年の反抗心を刺激してしまったのだろうか。

思いもかけないことを尋ねられ、今度はナタリーが困ってしまう事になった。

「ナタリーさん、昨夜はレッドさんと一緒にいたんですか？」

「ええっ!？」

なんて事を聞くんだ! と真っ先に思った。

この少年、見かけによらず耳年増なのか?

「ど、どうしてそんなこと聞くの?」

「マリエおばさんがそうだって言ってたから……」

「いや、そういう事じゃなくてね……」

ナタリーが何を慌てているのか、クリスには分からない。

「レッドさんに会いたいんですけど、どうすれば会えますか?」

「ええええ!?! レッドに会う!?!」

「あ、は、はい」

ナタリーが何故そんなに驚くのか、クリスには分からない。

「ど、どうして?」

「もう一度きちんとお礼が言いたくて」

「あ、な、何だ。そう、そうなの」  
クリスはきよんとする。

邪推されていたとは思えない。

ナタリーは密かに自分の行為を恥じながら

「君の様子を見にそのうち向こうから来ると思うよ。なんだったら私がレッドに伝えといてあげる。でも今日は無理みたい。大切な用事があるって言ってたから」

「そうなんですか」

「うん。そうなの」

ナタリーは笑顔で答えた。

なんだかわざとらしい笑顔。

クリスの肩に座ったまま、にたにたと笑っているシルフィは無視した。

\*\*\*

デューン・シス・オーランは『大神官補』である。

文字通り、『大神官』の補佐がその勤めだ。

大神官とは、この国の意思決定機関のひとつ『大神殿』の長だ。

その大神官を支える大神官補という役職。

一見、重要なポストのように思えるが、そうではなかった。

デューンのために作られたポストなのである。

名ばかりの、有名無実な役職だ。

おそらくこの先『大神官補』という役につくものはデューン以外いないだろうし、歴史に名を残すこともないだろう。

しかしデューンの肩書きがどうであれ、レッドとハルカにとっては彼は雇用主だ。

しかも金払いの良い雇用主。  
それで十分だった。

「それで、どうだった。噂の真偽のほどは？」

身を乗り出すデューンにハルカは冷たく答えた。

「残念ながらただの噂。教団支部なんてどこにもなかったわ」

「そうか」

デューンは肩を落とし、溜息をつく。

デューンのあからさまな落胆振りに、ハルカは

「そんなに残念？」

「いや、そうでもないんだけどね」

「どっちなのよ」

頭を抱えてしまう。

「でも、火のないところに煙は立たないって言うだろ。教団支部なんて噂が立ったぐらいだから、火元ぐらいはあったんじゃない？」

「それはお前の言う通りだ」

答えたのはレッド。

「教団信者の数はかなりのものだ。信者の数に比例して信心の深さも大したものだ。彼らをまとめる者が現れれば、確かに支部と呼べるほどのものが出来るだろうな。もっとも真似事をしている連中ならすでにいたが」

「へえ、それは興味深いね」

「話すほどでもない。お山の大将を気取りたいだけの金持ちのどら息子、てところだ」

「ふーん」

さらに追求するかと思いきやそうはせず

「でも不思議だね。フ랑グールといえども豊かな国だ。国民の生活レベルも高いと聞いている。何かにすぐる必要なんてないと思うんだけどな」

「だからこそ、かもしれん。豊かだからこそ精神的にも満たされたいのだろう。人の欲望には果てがない、といったところか」

「難儀なもんだね」

「そうだな」

軽く嘆息するデューンに重々しく頷くレッド。

ハルカは男二人の会話には加わらず、お茶を飲んでいる。

「このお茶、おいしいわね。おかわりある？」

話がひと段落ついたと見ると、カップを両手に包みながら、デューンにたずねる。

「あるよ」

デューンは机に置いてあった呼び鈴を振った。

チリンチリン。

待つほどもなく部屋の扉が開いた。

「失礼します」

カートにお茶道具一式を乗せて、使用人が一人入ってきた。  
年のころは12，3歳。

まだ仕事に慣れていないのか、所作はどことなくぎこちなく、表情も硬い。

が懸命であることは分かる。だからその頼りなさが、好意的に映る。  
お茶のおかわりを入れてくれた事にハルカはメイドに礼を言い、それから呆れた様にデューンを見る。

「また新しい子を入れたのね」

「うん、そうだよ。」

ああ、そうだ。ちょうどいい機会だし、紹介するよ。

この子はケイ。二人とも、仲良くしてやって欲しい。

ケイ。こちらの二人はレッド・テッドとハルカ・エア」

使用人は頭を下げる。

「はじめまして、ケイです。よろしくお願いします。」

お二人のお噂は聞いております」

「ああ」

「はじめまして。よろしく」

レッドとハルカも軽く会釈を返した。

それからハルカは不躰に、ケイを上から下まで眺める。

「ずいぶんと若い子ね。そういう趣味だったの？」

趣味云々が何を意味しているのかわからないので、それは聞き流す。

「イレナ様の紹介でね」

断るに断れなかった、とは口にしない。

それをすれば傷つくものが約一名、ここにいるからだ。

だがレッドはそんな気遣いをしない。

「また面倒なことを引き受けたな。大神官殿の不興を買うだけだろうに」

「まあね。でも慣れてるから」

デューンは笑って答えた。

この国には二大勢力がある。

王族と官族だ。

(中略)

大神官、とはもちろんデューンの異母兄——ルマ・ヤダイ・オーラのことである。

そしてデューンが先に口にした「イレナ様」というのは、イレナ・ビナースのこと。

現女王の側近中の側近とみなされている女性だった。

つまりは王族だ。

王族と官族は対立している。

それは表立ってのことではないが、互いに反目しあっているのは周知の事実だった。

そういう関係であるから、仮にも官族であるデューンが王族と接触を持つ、子供とはいえ王族の関係者を雇い入れる、ということによる感情を持つ官族は皆無だった。

しかし面と向かってデューンを非難できるのは、大神官だけだ。

「じゃあ、この子も王族なの」

イレナ・ビナースの紹介ならば彼女の遠縁の者であると考えたのだ。



デューンの答えははなはだ頼りないものだった。

「そうじゃないかな」

「おいおい」

レッドは呆れる。

「いい加減だな。身元くらいは確認しろ」

「あなたが言えた義理じゃないんじゃないの、レッド」

「それもそうか」

ハルカの言葉に、レッドは自嘲した。

身元を保証するものが何もない、という点ではレッドも一緒だったからだ。

もっともイレナの紹介なのだったら、この使用人の身元はしっかりとしたものだろうが。

単にデューンがそういったことを気にしない、大雑把な性格ということなのだが。

「でも本当にあなたは面倒事が好きよね、デューン。厄介事の種をそばに置いておくんだから」

「そうかな」

「そうよ。仮にもあなたは官族、それも『大神官補』なんだからデューンは困惑気味に」

「でもケイはいい子だよ」

「それはこの関係ないの」

乱暴な物言いだが、ハルカの言うとおりだった。

王族と官族が互いを敵視しあうのは、王族が王族であり官族が官族であるからだ。

そこに、個人、というものの入る隙間はない。

デューンとて、もちろんそれは分かっている。

しかし彼は強情に言い張る。

「でもケイはいい子だよ」

「ええ。そうでしょうとも」

ハルカにデューンを非難するつもりはない。

ただ呆れているだけだ。

二人のやり取りに、肩身の狭い思いをしているだろうケイに、デューンは優しく声をかけた。

「ケイ。ハルカの言うことなんか気にする必要はないからね。ずっとここにいてくれていいんだよ」

「デューンさま……」

デューンの優しい言葉に、ケイは頬を染める。

メイドのそんな様子に、ハルカはまた意地悪を言い出す。

「嫌味を言われるだけじゃすまないかもよ、デューン」

怪訝な顔でハルカを見返すデューン。

「よくない噂も立ちそうじゃない」

「噂？」

「そう。」

『大神官補はあろうことか己の立場を利用して年端も行かない使用人の少女に夜毎奉仕をさせている』

——とかね」

ハルカはにやりと笑う。

言葉の意味が分からないとでも言いたげに、彼女を見返すデューン。ハルカが何を言ったのか理解したとき、デューンは吹きだしていた。

「ぷっ。あはははは。ハルカ、君、勘違いしてるよ」

いきなり笑われて気分の良いはずもない。

ハルカはデューンを睨み付ける。

「何が？」

「ケイは男の子だよ」

「え？」

今度はハルカの番だった。

デューンが言った言葉の意味が理解できずにきよんとする。そして――

「ええええええええええっ!!」

叫んでいた。

「でかい声だな」

レッドが呟く。

デューンはハルカをニコニコと見ている。

ハルカはケイをまじまじと見つめ、恐る恐る――

「本当？」

恥ずかしそうに頬を染めながら、ケイは答える。

「はい。本当です」

しかしハルカの間違ひは決して特別ではない。

「よく間違われるんです」

「でしょうね」

男の子だと聞かされた今でも、ハルカにはケイが女の子にしか見えない。

きれいな顔立ちをしているから――というだけではなく、彼女、いや彼の持つ雰囲気そのものが『女の子』なのだ。

どこにも男の子を感じさせるものがない。

そう、どこにも。

ケイが身につけているのは、メイド服で、メイド服はふつうは女性しか着ないのである。

これでは間違う。

間違うなというのが無理な注文だ。

いや、そもそも――

「ちょっと、デューン。ケイ君は男の子なんですよ。なのにメイド服着せてどうすんのよ。かわいいそうじゃない」

「いや、だって似合うから」

デューンはしれっと答える。

悪びれた様子はまるでない。

ケイは赤くなっとうつむく。

そんなケイを見つめながらハルカは

「うん、まあ確かに」

「……ハルカ様まで」

消え入りそうなケイの声にハルカはあわてて

「ああ、ごめんごめん。ごめんねえケイ君。君があんまりかわいいもんだから——じゃなくてえ」

思わず本音を口走ってしまいハルカは慌てる。

「ふふ」

聞こえた笑い声に、ハルカはレッドを睨みつけた。

「何をニヤニヤしてるのよ」

「お前の悪い癖が出たな、と思ってな」

「悪い癖え？」

「クリスが不憫だな、とも思ったのさ。早速浮気をされてはな」

「これとそれとは違うわ。それにかわいい男の子に声をかけるのは、女としての嗜みよ」

「そうだな。まあ、俺がとやかく言うことでもないな。よろしくやつてくれ」

「言われなくてもやります」

二人のやり取りにケイはぼかんとする。

ハルカはそんなケイに笑顔を向ける。どこことなく、獲物を前にした猫のような笑顔だった。

デューンは二人のやり取りには慣れているが、聞きなれない名前が出てきたので、レッドに尋ねた。

「クリスって？」

「クリス・バード。帰りの道中で出会った少年だ」

「ああ、だからか。早速ハルカに目をつけられたわけだね」

「ちょっとやめてよ、人聞きの悪い」

「まあ、そうだな。気の毒なことだ。」

で、そのクリスだが、なんでも村のしきたりで一人旅をしているという話だった。正確には一人ではなかったがな。彼にも連れがいてな。シルフィ・シルフィーナという妖精だった」

「妖精！？」

さすがにデューンは声を上げた。

ケイも目を丸くしている。

「ああ、妖精だ」

「妖精って言うと、あの、何百年も前に絶滅した、ていうあの？」

「ああ、その妖精だ」

途端にデューンの瞳が輝きだす。

恋に恋する少女のように、きらきらと輝きだす。

「妖精……。未知なる世界の象徴……。じゃあまだ世界は人の手に渡ったわけじゃないんだ……。世界はまだ未知に溢れているんだ……」

うつとりと呟いていたかと思うと、突然デューンはレッドに詰め寄る。

「まさか、レッド、君、妖精と話したの？」

「ああ、話した。中々面白いやつだった」

「うわあああああ！」

聞くなりデューンは天を仰いで叫んだ。

「いいないないないなあ」

子供のように騒ぎ出す。

そんなデューンに微笑みながらハルカは

「そんなに羨ましいのなら「おかみさんの店」に行くといいわ。妖精に会えるから」

「え？ どうして？」

大きな声を今度はハルカに向けるデューン。

「シルフィは今、そこでお世話になってるのよ。正確にはクリスマス君が、だけど」

「妖精に会えるの？」

「ええ、そう」

「よし行こう」

デューンの決断は早かった。

「今行こうすぐ行こう」

そこにおずおずとケイの声。

「デューン様。今日はこれからご予定が……」

「ああ、そうか」

途端にデューンは肩を落とす。

「学校に行かなきゃならないんだ……」

子供たちに、この国の歴史、神学、そして「教団」について教えるのがデューンの仕事なのだった。

「ロゴス神学校特別講師」というのがデューンの二つ目の肩書きだ。  
「学校ね」

意地の悪い声でハルカが呟く。

デューンの学校での仕事振りを想像しているのかもしれない。

もっとも聞いた話では、生徒たちにはそこそこ人気があるそうだ。

「ところでラスの様子はどうか？ 相変わらず優秀か？」

「ラス？」

レッドの問いに、最初は何のことやら分からない様子でいたが

「ああ、ラス・メイ」

思い当たったようで、デューンは大きく頷いた。

「そういえば知り合いだったね。君たち。」

うん。もちろんだよ。彼女はいつでも優秀さ。僕の代わりくらいいつでも務められるくらいにね。

いっそ、そうしてもらおうかな。そうしよう。そして僕は妖精に会いに行こう。うん。それがいい」

その考えがとても気に入ったのか、デューンはニコニコとしだした。その笑顔がケイにはとても不安だ。

「デューン様……」

デューンは笑顔のまま、ケイの杞憂を笑う。

「冗談だよ。冗談。言ってみただけさ」

デューンはそう言うが、半ば本気であることはレッドとハルカには分かっていた。

ケイも不安を拭えないのだろう。

落ち着かない様子で、主の笑顔を見つめている。

## その11

『ロゴス』という語には『言葉』という意味がある。  
『真理』という意味もあるし、『感情』『意識』『愛』という意味も持っている。

前後の文脈で意味を変える——そんな言葉だった。

そんな『ロゴス』を人間たちに教えたのは二人の女神——それがこの国に伝わる神話だった。

だからこそこの国の王は、建国以来、女性なのだ。

そんなロゴス神王国で、唯一制度化されている教育機関が、『ロゴス神学校』である。

教育内容は以下の通り。

礼儀作法は基本として——。

この国の歴史について教えている。

国の基となった神話への考察。

この国が領土を広げるための大きな力となった『教団』との関係（『教団』を独立した自治組織と認めているのは、ロゴス神王国だけである）、その歴史について。など。

しかし機関への納付金が高額なため、このような教育を受けられるのは、富裕層に限られていた。

実質、貴族による貴族のための教育機関でしかなかった。

だからラス・メイは特異な存在だった。

メイ家はごく普通の一般家庭でしかなかったからだ。  
納付金などとても払えるものではない。

では何故ラス・メイはロゴス神学校の生徒になることが出来たのか。  
彼女には足長おじさんがいたのである。

他ならぬレッド・テッドだった。

どういう流れでそういう会話になったのか当の二人も忘れてしまっ

ただろうが、人々について、この国について、教団についてのラスの考えを聞く機会がレッドにあったのだ。

その考察は、少女とは思えないほど深く鋭いものだった。

レッドは感動した。

これほどの才能を埋もれさせるわけにはいかないと考えた。

そこでレッドはデューンに相談した。

ラスを学校にやれないものかと。

デューンは、レッドが納付金を払うのなら何も問題はない、と答えた。

だからデューンもまたラスの足長おじさんといえたのだが、デューンがそのことを忘れ、直ぐにはラスを思い出せなかったことが、デューンの性格を物語っている。

そういういきさつをえて神学校の生徒になったラスは、瞬く間に主席の座に着いた。

同時にその存在は全生徒に知れ渡ることになる。

今度主席になった生徒は『市民』の出だそうだ――。

しかも大神官補の推薦を受けて入学したらしい――。

大半の生徒は反感と嫉妬を覚える。

しかし不思議とラスが孤立することはなかった。

ラスのクラスメイトは彼女に好意的だったからだ。

反感と嫉妬をもって彼女を迎えたものも、二言三言、ラスと言葉を交わすと、彼女を好意的に受け入れるようになっていた。

ラスは決してコミュニケーションに長けているわけではなかったし、どちらかといえば言葉数は少ないほうだった。

確かに容姿はそれなりに美しいが、人の目をひきつけて離さないほどの美貌ということでもない。

それでもラスには、彼女と言葉を交わしたものをひきつける何かをもっているようだった。

人徳、とでもいったものなのかもしれない。



ともあれ、ラス・メイの学校生活は概ね平穏で、波風が立つこともなかった。

そんなラス・メイは今、教団の歴史についてよどみなくすらすらと（どこか退屈そうに）述べているところだった。

「――『教団』の名がこの国の歴史に現れるのは百数十年前ほどのことでありません。

もちろんそれ以前から教団は存在していましたし、当然この国の指導者たちはそれを知っていたでしょう。

しかしその存在は問題視するほどのことではなかったのです。

当時、教団は国家――自治組織ではなく、ただの団体としか認められていなかったからです。

領土を拡大するための壁になどなるはずはなかった。

たとえばどんな主義主張を持ち出してきたところで、力で押さえつければいいだけのことでしたから。

しかしそうもいかなかった。

教団は確かに小さな団体ではなかったかもしれませんが、その影響力は大きなものでした。

なまじ『国』という領土を持っていなかったために、それが形として見えなかったのです。

教団信者はあらゆるところに存在していました。

この国にも。

彼らは抵抗勢力となってロゴス拡大の妨害となりました。

その勢力が思いのほか手強かったのでしょうか。

ロゴス首脳陣は方針を転換し、懐柔策に出ました。

つまり教団の存在を認め、対等の一国家として認めたのです。

そして教団には領土の一部を与え、そこで『国家』として独立するようにと、提案しました。

これは半強制的なものだったはずですが。

しかし教団側にしても断る利用はない。

流浪するしかなかった教団は、このとき初めて自分たちの領土を得、

国家として成立しました。

もちろん各地に広がっていた信者たちのほとんどがその土地へと移り住みました。

その土地は今『ダークパレス』と呼ばれています。

あるいは単に『パレス』と」

席につくラスの後をついだのは特別講師のデューンだった。

「そうだね。付け加えるなら教団の指導者は総主と呼ばれ、現在の総主はマイトレイヤ・ゾノツソという人物だ。さらに言うなら50年前も100年前も教団総主の名は同じで、マイトレイヤ・ゾノツソだ。だからといって同一人物が100年間も総主を務めていたはずもないだろうけれどね。つまり代々継がれている名なんだろう。襲名されているというわけだね。」

その一方でマイトレイヤ・ゾノツソは不死者だと信じているものも根強く存在しているけどね。確かにそのほうがロマンだね。世界はまだ未知なるものであるという証なんだから」

生徒たちから小さな笑い声が上がった。

一回の講義で、ロマンという言葉が最低三回は出る。

そして今日はこれで五回目の『ロマン』

それがおかしかったのだろう。

ごはん、とデューンは咳払いした。

「ありがとう、ラス。とてもよくまとまっていたよ」

「どうも」

席に座ったまま、ラスは軽く会釈した。

そんなラスにデューンは微笑みを向ける。

「ホントに君は優秀だね。いっそのことここに立ってみるかい？」

言葉の意味が解せなかったのか、ラスはノーリアクション。

教団のデューンにただ目を向けている。

ガアアンガアアンガアアン。

そのとき鐘の音が鳴った。

終業の合図だ。

「今日はこれまで。お疲れ様」

デューンが生徒に好かれるのは、終業の鐘がなればきっちりと授業を終えるところにもある。

早速騒がしくなる教室内。

その騒々しさの仲でもよく通る声でデューンはラスを呼んだ。

「ラス。話があるんだけど、付き合ってくれるかい？」

ラスは頷いて席を立つ。

数人の友人がラスに声をかける。

「さっき先生が言ってたこと本気かもよ」

「だったら、引き受けなさいよ。そしたら面白そうだし」

「そうそう。ラスなら大丈夫だろうしね」

「うん」

ラスは頷いて、デューンのもとに向かう。

二人は連れ立って教室を出て行く。

デューンの後をラスは大人しくついていく。

職員室に着いたところで、二人の気配を察したかのように扉が開いて一人の職員が飛び出してきた。

目の前のデューンの姿にあわてて立ち止まる。

そして安堵の表情を浮かべた。

「ああ、よかった。デューン先生。今お呼びに行こうとしていたところなんです」

「どうしたの？」

「先生にお客さまがお見えになっっています」

「そんな予定はないけどな」

デューンは怪訝な表情を浮かべながら――

「で誰？」

「大神官第一秘書官殿です」

デューンの眉間に皺がよる。

「イグニス殿か……」

重い溜息とともに呟く。

どうやらデューンが、来訪者に対してよい感情を持っていないらしいと職員にも分かったが、出来ることは気の毒そうに言葉を続けることだけだった。

「あの、校長室でお待ちになられていますので……」

「うん、分かった」

職員に頷き返すとデューンは職員室の隣にある校長室に向かった。扉をノックする。

返事を待たずドアを開けた。

机の天板に両手を組んだ腕を寄せ、椅子に背を預け、正面——つまりデューンを見返してくる男がまず目に入った。

ノード・イグニス。

大神官第一秘書官だった。

「ずいぶんとお待ちしましたよ。大神官補殿」

「申し訳ありません、第一秘書官殿。何せまったく予定にないことですから」

「そのくらいは構わんだろう。大神官補殿は我々と違って時間を持て余しておいでだろうから」

「そんなことはありませんよ。しかしお忙しいあなたが貴重な時間を割いて一体私に何のようです？」

「君にではないよ。だがどうしても君に話を通しておかねければならないのでね」

ならその話とやらをさっさと済ませてお帰り願いたい。

デューンは声に出さずに答えた。

もちろんイグニスにその声が聞こえるはずもなく、無言を返すデューンに気分を害したようだった。

「……とりあえずドアを閉めたまえ」

「これは失礼」

デューンはさらりと答えた。

おそらくはその態度がまたもイグニスの不興を買っただろうが、知ったことではない。

デューンはイグニスが、出会った時から嫌いであつたし、イグニスにしてもそうだろう。

犬猿の仲、とはこのことだ。

そしてそれが改善されることは、おそらく、ない。

ドアを閉めようと振り返ったデューンは、そこでようやくまだ彼の後ろに立っているラスに気がついた。

「ああ、悪いんだけど、ラス。今日は都合がつかなくなってしまったんだ。話はまた明日、ということにしたいんだけど、いいかな？」  
ラスは頷いた。

「じゃあ今日はもういいよ。お疲れ様」

ラスがもう一度頷き、校長室を後にしようとした時、イグニスの声が聞こえた。

「待て。ラス、といったな。そこにいるのはもしやラス・メイカ」

ラスの姿はデューンの背後に隠れ、イグニスからは見えない。

「そうですか」

デューンの声はとがっている。

自分の生徒の名を気安く呼ばれたことが気に入らないのだろう。

「ならちようどいい。手間が省けるといふものだ。彼女にも話を聞いてもらおう」

「何故です」

「彼女にこそ用があるということだ。君などに、ではなくてね」

デューンはしばしイグニスの上に視線を置いた。

イグニスも鋭く見返してくるだけで、用件の内容を先に言う気はないらしい。

デューンは再びラスに声をかけた。

「聞いている通りなんだ、ラス。君にもここに居てもらわなくちゃな

らなくなっただけ、平気かな？」

ラスは頷く。

デューンも頷き返し、そこでやっとドアを閉めた。

本来は校長が座るべき椅子であり執務机だが、今はそこにイグニス  
がもともとそこが自分の場所であるかのような横柄さで収まっている。  
る。

（デューンから見ても）机の手前のスペースには、浅いU字型のソフ  
アーが、左右の壁に沿うようにして置かれている。

一方のソファアーにはすでに二人の人物が身を沈めていることには、  
当然ながら最初から気付いていた。

一人は『ロゴス神学校』の校長。

今一人は見知らない顔だ。

一体誰なのか？

好奇心が湧かないわけではなかったが、名を尋ねるのはやめておい  
た。

どうせすぐにも紹介されるであろうし、イグニスの前でそんなこと  
をすれば、また嫌味を言われるに決まっている。

デューンは空いている方のソファアーに腰を下ろす。

ラスを促がして、自分の隣に座らせた。

こつこつこつこつこつ、と机を指で叩いていたイグニスだったが、  
ラスが座ったところで指の動きを止めた。

手を組む。

「話を始める前に紹介しておこう。彼はトラニー・トラン。『教団』  
からの特使だ」

イグニスの言葉を受けて、校長の隣に座っている男性が頭を下げた。  
まだ若い。

青年、と聞いていい。

デューンとそんなに歳は変わらないだろう。

「トラニー・トランと申します。はじめまして」

そしてトランは不躰なほどまっすぐにデューンを見る。

「お目にかかれて光栄です。デューン・シス・オーラン様。御高名は存じ上げております」

そしてラスを見る。

「それにラス・メイ様。あなたのお噂も聞いておりますよ」

笑みを浮かべる。

声音と同様、ゆったりとした落ち着きのある笑顔だった。

「では本題に移らせてもらいますよ、トラン殿」

「ええ」

イグニス hands を組みなおす。

「単刀直入に言おう。ラス・メイ、『教団』に行きたまえ」

「イグニス様イグニス様」

トラーニ・トランが苦笑している。

「それではあまりにもわからない。せめて順を追って説明しないと。良ければ私がお話しますが」

「む、そうだな。では頼む。トラン殿」

イグニスの声が強張っている。

人に笑われることには慣れていないノード・イグニスだ。

「では私からご説明申し上げます。」

あなたに教団に来ていただきたい、というのは我が教団総主の願いなのです。

ラス・メイ様にぜひ教団に来ていただきたいと、総主は望んでいるのです。

あなたのお噂を聞いて以来、総主はずっと考えていたようなのです。ああ、噂というのは、ロゴス神学校に実に優秀な生徒がいるというもの。もちろんあなたのことですよ、ラス様。特に教団への考察が深く鋭いものと聞いております。

一度あなたとお会いし、その意見を直接聞いてみたいものだ、と総主は言っておりました。

あなたとお会いする――そのあとのことも、総主は考えているよう

です。

ロゴス神王国と教団のより深い絆のための橋渡し役となって欲しい、とも申しておりました。

それにこれをきっかけに、留学制度を作ってもよいのではないかも申しておりました。

ロゴス神王国との関係を新しい段階に押し上げるときだと、総主は考えているようです。

どうでしょう。ラス・メイ様。お引き受けくださいますか。

我が教団に来てはいただけないでしょうか」

悪い話ではないな、とデューンは思った。

ラスの意見は別かもしれないが。

デューンはラスの様子を窺う。

ラスはいつもと変わらない静かな表情だった。

それでも、その表情には困惑が浮かんでいるようにも見えた。

しばらくの無言のあと、ラスはぽつりと呟いた。

「時間をください」

イグニス目は丸くする。

「時間？ 何のためだ、ラス・メイ。まさか考える時間をくれといっているわけではあるまいね。その必要はないだろう。考える必要など。幸運が目の前にやってきたんだぞ。君は頷きさえすればいいんだ。『はい』と言えさえすれば」

ラスは繰り返した。

「時間をください」

イグニスがまたラスを責めようとするのを、デューンは制した。

「イグニス殿。確かにこれは大変名誉な話かもしれませんが。ですがあまりにも突然の話でもあります。すぐには彼女も決めかねるでしょう。どうか私からもお願いします。ラスに考える時間を与えてはくれませんか。彼女も気持ちを整理する時間が必要でしょうし、それにご家族にも相談しなければならぬことでしょう」

言い終えると、デューンはイグニスのまっすぐに見た。



反論されたためだろう、イグニス は 仏頂面だ。

それでも確かに即答を迫るといふのは、性急に過ぎたという思いはあるのだろう。

仏頂面のまま、頷いた。

「わかった」

それを聞いてデューンは笑顔を浮かべる。

イグニスに頭を下げた。

「ありがとうございます。イグニス殿」

ふん。イグニスは忌々しげに鼻を鳴らす。

トランはこの二人のやり取りに何を思うのか、内心を覗かせない笑顔でデューンとイグニス、そしてラスを見つめている。

ずっと無言でいた校長は、やはりデューンを呼んで正解だったと、自身の判断の正しさに、胸を撫で下ろしていた。

デューンがいなければおそらく、ラスは、彼女の意見などお構いなしで、半ば拉致されるように『教団』へ向かうことになっただろうから。

## その12

『時間をください』

そうは言ったが、実のところラスにそれは必要なかった。

その言葉を口にしたとき、ラスの中で答えはすでに出ていたからだ。トラニー・トランシー教団から来たというその男を紹介されたとき、ラスはイグニスの言う用件とは何であるのかということを悟り、だからその瞬間に答えは出ていた。

考える時間は必要なかった。

ラスが欲しかったのは実行するまでの時間だ。

別れも告げず、去らなければならない——決意するための時間だった。

クリス・バードは今、本日最後の仕事に取り掛かっている。

食器の後片付け。

それは旅に出る前からクリスの仕事であつたから、手馴れたものであつたが、その多さは以前とは比べ物にならない。何せ数十人分である。

しかしクリスにはうんざりした様子はない。

むしろ、洗い甲斐を感じているような表情だ。

「少年少年」

声に振り返り、そこにナタリーの姿を認めたとき、クリスは珍しく不機嫌な顔をした。

「ナタリーさん」

その声は少々とがっている。

本当なら、食器洗いのこの仕事はナタリーと分担してやるはずだった。

しかしナタリーが中々現れないので、結局クリスが一人でやること

になったのである。

「何ですか？」

クリスが気分を害している原因が自分だとは、ナタリーはまるで氣付いていないようだった。  
もしくは氣にしていない。

「ちょっとちょっと」

クリスを手招きする。

「何なんです？」

ナタリーの、彼女らしからぬまどろっこしいやり方に興味を覚え、濡れ手をエプロンで拭きながら、彼女の側まで寄る。

中腰になり、クリスの目をまっすぐに見つめながら、何の前置きもなくナタリーは――

「ラスの様子、見てきてくれない？」

「ラスがどうかしたんですか？」

「うん」

頷いてナタリーは答える。

「暗いの」

「え？」

「暗いんだよ。学校から帰ってきてからずっと」

「そうかなあ。いつもと同じに見えるけど」

ラスとは昨日知り合ったばかりのシルフィが、ふよふよと宙に浮いたまま言う。

「全然違う！」

シルフィだけでなく、クリスまで驚いてしまう強い調子で、ナタリーは妖精の言葉を否定した。

「いつもはね。暗いって言うんじゃない、ただ静かなだけなの。だけど今日はね、違うの。暗いの。きつと学校でいじめられたに違いないわ。ラス以外はみんな貴族だし、それでいてラスの成績は飛びぬけているし、みんなひがんでるのね、きつと。ラスもつらい思いをしてるんでしょうね。でも弱音を吐くような子じゃないし、私

たちに相談するようなこともしない。心配をかけまいとしているんでしょうけど……。

クリス、そこで君の出番となるわけ。それとなくラスの悩みを聞きだして欲しいの。私には絶対話してくれないだろうし、でも君になら、ラスも話す気になるかもしれないから」

「そうなんですか？」

クリスの間の向けた返事に

「そうなんですよ」

とナタリーは返した。どこまで本気でラスの心配をしているか、わからない態度だ。しかし「どう？」とクリスの返事を促がすナタリーの目は真面目だった。

「いいですよ」

もちろんクリスに、断る理由はなかった。

ナタリーはにやりと笑う。

「よし。そうと決まれば行った行った」

クリスの背中を押し、厨房の中から追い出す。当然のようにクリスの後についていく妖精を、ナタリーは呼び止める。

「ちょっと待った、シルフィ」

「何？」

振り向いたシルフィの体を、ナタリーは両手のひらですっぽり包み込むようにして捕らえてしまう。

「何のまねよ、これは」

当然ながらシルフィの声には怒気が含まれている。ナタリーを睨みつける。ナタリーは平然としたもので――

「あんたはここにいろの」

「何でよ」

「そりゃあ決まってるでしょ。クリスがやり残した仕事を最後までやってもうためよ」

確かに洗いかけの食器、まだ洗っていない食器がある。しかしそれはシルフィの知ったことではない。

「ナタリーがやればいいでしょ。だいたいクリスはナタリーの頼みを聞いて行っちゃたわけだし、当然ナタリーがやるべきよ」

「それがだめなのよねえ」

「何だよ」

ニヤニヤ笑い出したナタリーをシルフィはさらに睨みつける。

「それじゃあクリスとラスが二人つきりになれないでしょ」

「……どういう意味よ」

妖精の声に凄みが増す。やはりナタリーは平然としたもので

「私、クリスみたいな弟が欲しいんだよね」

一見、何の脈絡もないことを言った。しかしシルフィはその真意をすばやく見抜いた。

「ラスにクリスをたぶらかせる気!？」

「どっちかと言うとクリスにチャンスをあげようとしてるんだけど」

「だめだめだめだめ! そんなの絶対だめ!」

シルフィはナタリーの手の平の中で暴れに暴れる。しかしナタリーは妖精を解放しない。

「女のやきもちはみっともないよ」

「だめったらだめ!」

会話になっていない言葉を交わしながら、ナタリーはにやにや笑って、シルフィは叫ぶ。

\*\*\*

店を出ると、ラスはすぐそこに居た。

庭——というほど立派ではないが、道路に面した敷地にはベンチが三つあり、そのひとつにラスは腰掛けていた。

クリスにはラスの背中しか見えないので、彼女が何を見ているかはわからない。それでもクリスはラスが視線を向いているだろう、道路を挟んだ向かいを見やる。

特に変わったものは映らない。

家々とその間にある路地の暗がり、窓窓から漏れる明かりの色だけ。クリスは再びラスの背中に視線を戻す。とても寂しそうに見える。

誰かを待っているように見える。

「ラス」

クリスの口からその名がこぼれ出る。

ラスは振り返ると、クリスを見上げた。すでにクリスがそこに居たことには気付いていたのか、驚いた様子は見えない。

「何？」

「え、えと……」

ラスに見つめられ、すぐには言葉を返すことが出来なかったが、何とか言葉を見つける。

「い、いい夜だね」

ラスはクリスを見上げたまま、少年を見つめている。クリスは気恥ずかしさに堪えられなくなって視線をそらすと、空を見上げた。ラスもまた夜空を見上げた。夜のすべてを照らす光を放って、白い満月が浮かんでいる。夜の太陽のように。

「そうね」

ラスの声は静かだ。この美しい夜に何を感じているのか、何かを感じているのかは、その静けさからは、わからない。

ふいにラスは立ち上がった。道に出るとどこかへ向かう様子を見せ、思い出したように振り返り、クリスを見た。

「来ないの？」

「い、行く」

ラスの意図はわからないままにクリスは頷き、ラスのもとに駆け寄る。二人は連れ立って歩き出した。

ただ静かに歩を進めるだけの二人だったが、ぽつりとクリスの声。

「ねえ、ラス。何か悩み事でもあるの？」

「ないけど。何故？」

「ナタリーさんがそうじゃないかって。心配してたよ。僕も――」

気がつけばラスがじっと見ていた。クリスは真っ赤になりながらも言い切る。

「――心配だな」

「悩みなんてないわ」

「そ、そう」

クリスの顔はまだ赤い。胸はどきどきしている。

「だってわっかているもの。私は何をすべきなのか」

「う、うん」

クリスは頷く。ラスの言葉は理解していない。

再び静寂がおりる。今度はラスがその静寂を破った。

「ねえ、クリス。一緒に来てくれない？」

「ど、どこへ？」

「だめ？」

問いには答えず、ラスはクリスをまっすぐに見つめた。

そんなふうにされて、クリスに断れるはずがない。

「う、うん、行く。一緒に行くよ」

「ありがとう」

ラスの微笑みは小さなものだったが、クリスの胸はそれだけでホンワリと暖かくなるのだ。

「じゃあ、戻りましょう」

「うん」

ぼんやりと頷いたあと、クリスは一瞬と我に返り

「でもさっき、どこかに行こうって」

「ええ、でもまだ早いわ。月がもっと西に傾いてからでないと」

月は中天にある。人々が寝静まる時間はもう少し先。

「そうなの？」

ラスの言わんとしている事はよくわからないままに、クリスはいきなりあえず頷いた。

「じゃあ、戻りましょう」

同じ言葉を繰り返したあと、呟きが続く。

「本当は嫌だけど」

(つらいだけだから)

最後の呟きの意味がわからないクリスだから、ラスが心に呟いた声が、聞けるはずもなかった。



## その13

「時間が来たら迎えに行くから」

ラスに耳打ちされ、クリスは、ひゃんつと声を上げそうになった。

ラスの囁き声が耳たぶをなで、こそばゆかったのだ。

ラスが不思議そうにクリスを見ている――。

そのときの様子を思い出すと、クリスの頬は自然とゆるむ。

自分より四つも年上の女の子をかわいいと思ってしまう。

いつラスが迎えに来るともわからないので眠らないようにしているが、あのときのラスを思い出すだけで顔は火照り、胸は高鳴り、眠気を堪える必要もなく、寝付けるものではなかった。

そのはずだったが、時間が経てばやはり眠くなる。

しかし眠るわけにはいかない。

クリスは羊を数えることにした。羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹。

羊が四匹、羊が五匹、羊が六匹、羊が七匹、羊が八匹、羊が（中略）

百五十三匹――。

百五十四匹目の羊が柵を超えようとしたとき、控えめにドアをノックする音があった。

半分眠りかけていたクリスだったが、その音ではっと目を覚ます。

あわててベッドから抜け出す。

その勢いのままドアまで駆け寄ってノブをまわす。

「ラス」

目の前に立っている少女の名を呼ぶ。笑みがこぼれる。

ラスはいつもの静かな表情のまま、クリスが、確かに彼女の知る少年であることを確認するように、彼の上にしほし視線を置いたあと、

「いいの？」

「うん」

クリスは頷く。いまさら迷うはずはない。

クリスは部屋を出る。

二人は静かに階段を下り、静かに食堂を横切り、静かに玄関の扉を開け、そっと外に出る。

月は西の空。

星星の小さな瞬きは数え切れない。

二人は空を見上げることもなく、足音を立てないように、メイ家から足早に遠ざかる。

ラスは無言で歩を進める。

クリスは黙って後についていく。

しばらく経って、メイ家がどこにも見えなくなってからラスは立ち止まる。

振り向き、クリスをじっと見つめる。

「今ならまだ間に合うかもしれない」

「え？」

「少しでも迷いがあるのなら、帰って」

「あるわけないよ」

クリスは即答した。

「ラスト一緒にいられるんだから、そんなのあるわけないじゃないか」

クリスは顔を赤くしながらも続けた。

「そう」

ラスは小さく頷く。

「じゃあ、いいのね」

「うん」

クリスはしっかりと頷いた。

「シルフィも」

「いいわよ」

「え？」

ラスの言葉とそれに答えた声に、クリスは驚き振り返る。

頭上五c mのあたりを、ふわふわと見覚えのある姿が浮かんでいた。

「シルフィ……」

クリスは呆然と呟く。

「いつの間に……」

「遅いわよ」

クリスが部屋を出るときからその頭上にいたというのに、やっと気付いたクリスに、シルフィは呆れ声を返す。一転、その口調は鋭さを増し、

「私をおいてどこに行こうっていうの、クリス。しかもラスと二人でなんてさ。私がそれを許すとも思ってるの。そんなわけないでしょ」

「ごめん、シルフィ。でも……」

クリスはラスの様子を窺う。ラスは、クリスのようにには驚いていなかった。当然だ。彼女は最初から気付いていたのだから。シルフィも一緒に来るのだとしか考えなかったから。

「何？」

「うん、その、大丈夫なのかなって……」

「私を連れて行っても平気なのかってクリスは聞いているの」

シルフィの通訳を聞いて、ラスは静かに頷いた。

「平気よ、問題ないわ。でも町を出るまでは静かにしていて」

「うん、わかってる」

「はいはい」

\*\*\*

前方に見える門をくぐれば町を出ることが出来る。

ラスに気の急いた様子はない。歩を早めることもしない。静かに門に向かう。

クリスと、今は彼の肩に腰かけているシルフィも、急ぐこともなく後をついていく。と、ラスが立ち止まる。

「隠れて」

言ったかと思うと、近くの物陰に身を隠す。クリス（とシルフィ）も慌ててあとに続く。

建物の影に一塊になった三人。クリスとシルフィが見守る中、ラスがぼつりともらした。

「おかしいわ。人がいるなんて」

「へ？」

クリストシルフィの声が重なる。

「なぜかしら」

不思議そうに呟くラスに、二人は困惑するしかない。

「一体何のことよ」

問いながら、シルフィはラスの視線を追い、彼女が見ているだろうものを見る。

門の傍らにある小さな小屋、それは警備員のための詰め所だろうが、なるほど確かに人がいる。しかしそれを見て取ることが出来るのはシルフィが妖精だからだ。人の視力では、あの、点にしか見えないものを、人と見てとることは出来ないのではないだろうか。最も、驚くほど目のいい人間というのはいるもので、そんなに驚くほどのことではないのかもしれない。

「ラスって目がいいのね」

シルフィは感心する。クリスも何とか二人のしているものを見ようと眉間にしわを寄せ目を細めているが、見えてはいないようだった。「で、それがどうしたの？」

「困るの」

「へ？」

クリスとシルフィの声がまた重なる。

「だってあの前を通らないと門を出ることは出来ないのに、あんなところに人がいたら見つかってしまうわ」

「まあ、それはそうよね」

「困ったわ」

ラスは静かに呟く。言葉とは裏腹に、それほど困惑しているように

は見えない。

どうやらラスはこの町を出たいらしい。それも、誰にも知られることなく。だから真夜中を過ぎたこんな時間を選んだのだろうし、だからまっすぐに門を目指して歩いてきたのだろう。しかし門番がいることに驚いている。守衛の仕事は、日中の人々の往来の監視ばかりではない。不審者の出入りを防止する務めもあるのだ。だからもちろん二十四時間三交代勤務である。たとえ真夜中でも守衛がいるのは当然だった。

ラスの驚きと困惑はちよつとずれているわけだ。しかしだからこそラスの意図が知れる。

真夜中を過ぎた時間には、さすがに門の出入りを見張る守衛もいなくなるはずで、だから誰にも見咎められず町を出ることが出来る。ラスはそう考えていたのだろう。いや、考えていた、といっていいのだろうか。そうではなく、何も考えていなかった、としたほうが正解かもしれない。

「はああああ」

シルフィが呆れて溜息をつく。行動は大胆なくせに計画性のかけらもない。

ラスを見ると「どうしようかしら」と呟いて、彼女なりに困惑はしているようだった。

クリスの様子は？と見ると一体何が起きているのかまるでわかっていないのだろう、ぽかんとしている。

「はああああ」

シルフィはまた長い溜息をついた。人間たちはどうにも頼りにならない。

「はあああ、仕方ないわね。私が何とかしてあげるわよ」

「どうするの？」

ラスがシルフィを見る。

「まず札を言いなさい」

「ありがとう」

「心がこもってない」

ラスを叱り付けるが、ラスは不思議そうにシルフィを見返すだけだ。シルフィはまた溜息をつく。はあああ。

すぐに気を取り直すと、先のラスの質問に答える。

「つまり私が妖精である証を見せてあげようってこと」

「意味がわからないわ」

「僕も」

「ああああ、もう、うるさい。私に任せておけばいいの！」

強く言い切ると、その勢いのまま宙に浮く。クリスとラスが見守る中、二人の頭上で静止すると、普段のシルフィからは想像できないほど神妙な面持ちになる。目をつむる。祈るように胸に手を当て人間たちには意味を成さない言葉をつむぎ始める。

不思議な声だった。

森の中にいる――目をつむれば、そう錯覚してしまいそうな声。

その声が肌に触れると、まるでそよ風に撫でられているかのような――。

その風には緑の匂いがあって、胸いっぱい吸い込むと、柔らかい日差しを浴びているような心地よさが全身をめぐる。

潮騒が引くように、妖精の声がやんだ。

クリスとラスは、はっと目を開けた。

いつの間にか二人はうっとり目をつむっていたのだ。まだ夢の中にいるかのような二人が見守る中、ゆっくりとシルフィが降りてくる。クリスの肩に腰を下ろすと思わずもらす。

「はあ、疲れた」

一息つきたい様子のシルフィに、ラスは尋ねた。

「今のが『妖精の証』？」

「そういうこと。ちよつと『ちから』を使ったの。すごいもんでしょ」

「ちから……？　僕たちに何かしたの？」

「もちろんそうよ。わかりやすく言えば、魔法をかけたってところ

かな。私たちは今、誰の目にも見えなくなっているのよ。気配も消してある。でも声は立てないように気をつけてね。念のために」  
そう簡単には信じられないようで、クリスは疑わしそうに

「ホントかな？」

「疑うとこの魔法、解けるから」

即座に返すシルフィに、クリスは押し黙った。

「声を立てなければいいのね」

クリスとは違い、ラスはシルフィの言葉を全面的に信じているのか、その声にはただ事実を確認する、という意味合い以外は含まれていないようだった。

「ええ、そうよ。出来るだけ静かに移動するのがコツね」

「わかった」

ラスは頷くと、物陰から身をさらす。

「じゃあ行きましょう」

何のためらいもなく門に向かっていく。シルフィは満足そうに笑う。  
「ほら、クリスも」少年をせかす。クリスも慌ててラスの後を追う。  
門は目の前。

二人はゆつくりと歩を進める。当然、隠れるものなどないので、詰め所内の守衛からは丸見えだ。しかし彼らに変化はない。慌てて外に出てくる様子はない。シルフィの言った通りだった。

（本当だ、見えてないみたい。すごいよシルフィ）

（当然よ）

（しっ！）

ひそひそ言葉を交わしながら、三人は詰め所の前を通り過ぎる。門をくぐり向けて、ついに町の外に出た。

門からかなり離れたところでようやく緊張を解く。

「やったね。ラス」

「……ええ」

ラスは頷いたが、無邪気に喜ぶクリスに比べると、どこか割り切れない様子でいる。

それも仕方のないことだろう。ラスが町を出なければならぬ理由  
はわからないが、人知れずに町を出る、ということは、誰にも別れ  
を告げずに、彼らの前から姿を消す、ということなのだ。そしてこ  
の町にはもう戻ってこない。彼らとはもう二度と会わない、という  
ことなのだ。ラスにとつての家族——マリエともナタリーとも、も  
う二度と会えない、ということなのだ。

ラスの気持ちをそんなふうに思いやったのはシルフィで、クリスは  
元氣のないラスを不思議そうに見つめているだけだった。シルフ  
ィは溜息をついてから、ラスに声をかけた。

「それでこれからどうするの。行く当てとかあるわけ？」

「ないけど」

「あのね……」

ラスの即答にシルフィは呆れる。

「無計画ってわけ……。クリスと同じね……」

「えへへ。——ごめん」

なぜか照れるクリス。

シルフィは溜息をついた。

まったく、人間たちは頼りにならない。



## その14

「君の家には今、妖精がいるそうじゃないか。ぜひ一度会わせてもらいたいんだけど」

そう聞くつもりで、授業が終わったあと、ラス・メイに声をかけたのにあんなことがあったためにすっかりそのことを忘れていた。

それもこれもあのイグニスのせいだ。

デューンはそう思っていた。

何故、よりによって昨日だったんだ。いや、そもそも学校に来なければならぬ用件だったのか？　まるで待ち伏せでもするように。

嫌がらせか？

もちろんこんな考え方は八つ当たりのなものでしかないことはわかっているが、イグニスに対する個人的な感情もあって、どうしても彼を責めたくなるのだ。

非生産的な思考はここで終わりにする。今日、忘れずにしっかりとラスに尋ねればいいだけにことなのだから。

職場に向かうに当たり、デューンが第一に考えたことがそれだった。仕事への熱意ある態度とはとてもいえない。だから罰が当たったのだ、と思うほどデューンは信心深くはないが、彼がこれから前日よりも嫌な思いをすることは確かだった。

「デューン先生」

事務員が駆けてくるのを見たとき、デューンはなんともいえない居心地の悪さを覚えた。嫌な予感がする。今すぐここから離れたい。回れ右しようかどうしようか迷っているうちに、事務員はデューンの目の前にやってきてしまった。

「おはよう、リン。どうかした？」

デューンが事務員に向けた笑顔は、彼の内心を隠すに十分なものだった。リンはデューン的笑顔にドギマギしながら、あわてて挨拶を

返したあと、歯切れ悪く続ける。

「あ、おはようございます、デューン先生。……それですね、あの、大神官様がお見えになっているんですが……。校長室でお待ちになられています」

デューンの笑顔が消えることはなかったが、リンは知っている。デューンが大神官——つまり、腹違いの兄に苦手意識を持っていることを。

「わかった。ありがとう」

笑顔のままデューンは頷いた。確かにそれはリンが考えたようにデューンの内心を隠すための笑顔である。だがデューンが義兄に抱いている感情は苦手、などという甘いものではなかった。嫌いなのである。大嫌いなのだ。ルマ・ヤダイ・オーランという存在そのものが。

確かに最初は苦手意識、という程度のものだったかもしれない。だが今や「出来るならこの先一生顔を合わせたくない」という悪感情にまで急降下していた。理由はもちろんあるだろう。それは二人の肩書きだ。

大神官と大神官補。

腹違いとはいえ、実の兄弟という関係が、彼らの関係を悪いほうに押しやったといえる。みなの手前、デューンはどうしても兄に本音を告げることが出来なくて、代わりに、本心を隠した笑顔を向けるしかなかった。その無理が重なり重なって、どうしようもない悪感情を、兄に抱くしかないようになってしまった。

子供に言い訳のようにも聞こえる。

そのことをデューンは自覚している。

自覚していてさえ、結局はどうにもならないのだ。

自分の本音を殺してまで、誤解を解こうとは思わない。兄との関係を修復しようとは思わなかった。

結局は、そういうことなのだ。

デューンは、今、目の前にいる、ルマ・ヤダイ・オーランという男

が嫌いだった。

それは大神官とて同じだった。

ルマもまた、この、腹違いの弟を嫌っていた。

デューンが自分を嫌っていることは感じられたし、そんな相手を好きになれるはずもない。もっとも初対面の時から「へらへらとした若造だ」とよい印象は受けなかったのだが、それが覆えることはなかったということだ。

「一体どうしたんです。大神官自らお越しになるなんて、それほど大切な用件があるのですか？ 私に」

笑顔のままで、デューンは十歳年上の、腹違いの兄に尋ねた。

弟の笑顔は、ルマには薄ら笑いにしか見えない。蔑むような視線を向けて、とげとげしい声を返す。

「見当もつかんのか」

「ええ、思い当たりませんね」

「ふん」

デューンの返事に、彼を馬鹿にしたように鼻を鳴らしたのは、ノード・イグニスだった。

大神官——ルマ・ヤダイ・オーランだけでなく、イグニスもこの場に居合わせていたのだ。さらに言うなら、トラニー・トラン——昨日紹介された教団の使者も、この部屋でデューンを待っていたのだ。だから本当は、彼らが何のためにここにいるかは見当はついていた。昨日の話の続きでもしたいのだろう。当事者のラス・メイを呼ばないのは、彼女に聞かせるまでもない話なのか、聞かせたくない話なのか。そう思いこんでいたから、その言葉を聞いたとき、デューンは少しばかり驚いた。表情に出るほどではなかったが。

「ラス・メイのことだよ」

イグニスが言った。

「あの娘が姿を消したのだ。今のところ、町のどこを探しても見つからない。町を出た可能性が高い」

「それは……」

としかデューンは言葉を返さなかった。

はつきり答えないデューンにイグニスは大きく舌打ちした。蔑む態度をもう隠そうとはしない。

「心当たりはないのか」

ルマの声はやはりとげとげしい。その態度は高圧的。デューンは気にしなかった。柔和な態度をとられても、気持ち悪いだけだ。

「ええ、ありません。残念ながら」

そう答えてから、思わず口を滑らしてしまう。

「しかし、よほど嫌だったんでしょね」

教団に行くのが。という言葉は口にせずにおいた。さすがにまずいと思ったのだ。が、手遅れだったらしい。

「口を慎まんか！」

ルマの一喝が飛ぶ。明らかな失言だったと自覚しているので、デューンは素直に頭を下げた。

「申し訳ありません。失言をお許してください、トラン殿」

「いやいや」

トラーニ・トランはそれほど気にした様子もなく手を振る。気にしているのはこの国の人間のようで、ルマとイグニスは、デューンを睨み付けていた。

「事情はわかったな、デューン」

ルマはさっさと要件を済ませることにしたらしい。頷いたデューンに、やはりとげとげしい声で命じる。

「では、デューン。ラス・メイを捜索、発見、捉え、傷つけることなく無事に私のもとに連れて来い」

すぐに答えないデューンに、イグニスが蔑みの声で言って聞かせる。「すべては大神官補殿、あなたの責任なのですよ。あなたがラス・メイの自主性などを尊重して、彼女に時間を与えたばかりにこうなってしまったのですからね。当然その責任は負うべきでしょう」

むちゃくちゃな理屈だな、とデューンは思った。彼はただラス・メイに考える時間を与えるべきだと提案しただけである。この国の代

表として教団に赴き、そこで勉学に励む、そしていつれはこの国と教団の橋渡し役として大きな責務を負うことになる、そんな重大事をその場で即答させようとするほうがおかしい。だからと言ってイグニスに責任があるとはもちろん思っていない。姿を消したのは他ならないラス・メイ自身だから、その行動にはラス自身が責任を負うべきなのだ。

もちろん責任の擦り合いなど無意味なことではない。デューンに責任があるというのならそういうことにしておけばいい。

「わかりました。ではすぐに準備します」

デューンは反論することなく素直に頷いた。ルマとイグニスがさつさとこの茶番じみた時間を終わらせようとしたように、デューンもまたそうだったからだ。退室するために二人に背を向ける。そこへルマの声が聞こえた。

「あの二人を使うのか」

デューンは振り向き、頷く。

「ええ」

「ふん、どこの馬の骨ともわからん連中をお前はよく平気で――」デューンはルマに最後まで言わせなかった。彼はルマをまっすぐに見つめながら言った。

「お言葉ですが、大神官殿。私はこの二人より信頼できる人間を知りません」

ルマはデューンを睨み付ける。デューンも視線をそらさない。しばらくの後、ルマは忌々しげに鼻を鳴らした。

「ふん、もういい。行け」

「はい」

デューンは頭を下げて今度こそ部屋を出る。

「ふう」

扉を閉め、ルマたちの視線が届かぬようになると、知らず知らずデューンは溜息をついていた。疲れるよ。胸中で呟く。ふと顔を上げると心配げな顔でリンが立っていた。

「リン、どうかした？　まさか様子を窺ってたの？　いけないな」  
「違いますよ」

リンは赤くなってデューンの言葉を否定してから  
「先生のがちよつと心配で。なんだか大神官様、すごく怒られて  
いる様子でしたから」

「まあ、確かに」

デューンは苦笑する。

「ちよつとしたお小言は頂戴したけどね」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。それより、リン。ちよつと急用が出来てしまつてね。  
今日の授業は出られなくなつたんだ。いや、今日から、かな」

「え？」

「大神官様のご命令でね。何より優先しなければならぬんだ」

「どういふことですか？」

「まあ、詳しくはイグニス殿に聞いてくれないかな」

「え？」

リンの声も表情も、彼女のイグニスに対する印象を素直に表していたので、デューンは思わず笑つてしまった。

「はは。イグニス殿も嫌われたものだな」

「いや、これは、その」

目の前でおたおたと慌てて手を振るリンに、デューンはまた笑つて  
しまった。

## その15

「ホント言うともう知ってたんだけどね。その話」

デューンは屋敷に戻ると、まずは使いのものをレッドとハルカのもとへ走らせ、すぐに屋敷にやってこさせるようにした。やってきた二人をまず自室に迎え、ケイにお茶の用意をさせる。それから急ぎの用件を切り出した。「ふんふん」と、神妙な面持ちで頷きながら聞いていたハルカだったが（レッドはなぜか屋敷にやってきたときからむすっと黙り込んでいる）、デューンが話し終わると口にしたのが、先の言葉だった。

「え、どうして？」

「レッドから聞いたの。レッドはナタリーから」

「ナタリー？」

「ラスのお姉さん」

「ああ」

頷いたものの、デューンはナタリー・メイとは面識がない。それにしても誰よりも真っ先に相談されるなんて、レッドはメイ家の人々にとても頼りにされているようだ。

「でも、そんな事情があったなんて知らなかったわ」

そんな事情、というのはもちろんラスの留学の件である。

「よっぽど嫌だったのね。町を出るなんて」

「そうだろうね」

「でもそんなに悪い話かしら。どちらかと言えばとってもいい話に思えるんだけど」

「うん。本当を言うと僕もそう思う。でもラスはそうは思わなかったんだね。だとしても町を出るなんて……」

と、そこまで言ってデューンはあることに気がついた。

「ちょっと待って。ハルカ、君、留学の件は初耳だって言ったよね。でもラスが町から消えたことはレッドから聞いて知っていた、そうも言ったよね。そしてレッドはラスのお姉さんからその話を聞いた、と。言うことはラスは家族にも留学のこと、話していなかった、てことになるんじゃない？」

「そうだ」

と答えたのは今までむすりと黙り込んでいたレッドだった。

「ラスは誰にもそのことを話していなかった。誰にも話さず、町から消えた」

「レッド、もしかして怒ってる？」

「当然だ」

即答するレッド。

「人に心配をかけさせているんだ。何で怒らない理由がある」

レッドがメイ家の人たちに頼られる理由、それがなんとなくデューンにも分かった。

「ラスを見つけて出して連れて来いと言う今回の仕事——もちろん引き受ける。ハルカ、お前もそうだな」

「ええ、もちろん。ラスは私にとっても妹みたいなもんだからね」

「と、言うわけだ。デューン、俺たちはすぐにでも発つ。あとはいつものようによろしく頼む」

いつもの——とは、報酬の件である。おそらくレッドたちは、デューンの話を見聞かずともラスの後を追っただろうが、デューンからの依頼を受け、これが仕事となった以上は、受け取るものは受け取る——そう言っているのだ。レッドも抜け目がない。

「ちょっと待って」

デューンの声に、レッドとハルカは驚いて彼を見る。「そういう話なら」などと言って報酬の支払いを渋るつもりではなからうな、と二人して同じ心配をしたようだったが、そうではなかった。デューンは続けてこう言ったのだ。

「僕も一緒に行くから」



「え！」

二人とも驚いてしまった。

「お前も一緒に？」

「どうということ？」

「どうもこうもないよ。言葉通りさ。僕も行く。すぐに準備するかちよっと待っていて欲しいんだ」

「いや、しかし……」

「心配いらないよ。報酬は全額前払いということにするから。そうしないと渡す機会がもうないからね」

「待て。どういう意味だ」

デューンは答えず、レッドとハルカよりもさらに驚いた様子でいるメイドに声をかける。

「ケイ。悪いけど手伝ってくれないか」

「あ、はい。デューン様」

連れ立ってデューンとケイは部屋を出て行く。レッドとハルカは黙って見送った。今まで一度として、デューンが同行を申し出てくることはなかった。立场上、出来なかった、とも言える。大神官補――有名無実な肩書きとはいえ、それでも責任や義務が生じ、自由気ままに振舞うことは許されなかっただろうから。先の言葉はデューンがそれを捨てた、捨てる、という意味の表れだ。レッドにもハルカにも、デューンを止めるつもりも、かといってその考えを後押しするつもりもなかった。決めるのはデューン自身だ。

「仕方ない。待つとするか」

「しょうがないわね」

溜息交じりに、レッドに同意するハルカの言葉は、デューンに向けられているようにも聞こえた。

ケイは、レッドやハルカと違って、デューンとの付き合いが長いわけではない。もちろん大神官補デューン・シス・オーランの名は知

っていたが、デューンと言う個人を知っていたわけではない。ケイがこの屋敷で働き始めて、二週間も経っていないのだ。毎日そば近くで仕えているが、彼の人となりを深く知ったわけではない。だからレッドやハルカが先ほどのデューンの言葉から、彼がどういう心積もりでいるのかを察したようには、ケイにはまだ理解できていない。

「あの、デューン様」

ケイがデューンにそう声をかけたのは、彼が室内着から外出着に着替え終わった時だった。

「ん？ 何、ケイ」

「はい。先ほどレッド様とハルカ様に仰っておられた事なんですけれど、一体どういう意味なんですか？」

「さっき？」

「すみません。どうしても気になってしまっただけ」

「謝る必要はないよ。でもケイが気にするようなこと、言ったかな？」

「はい、おっしゃいました。デューン様もレッド様とハルカ様に同行なさる、と。お二人とも驚いておられました」

「ああ、そのことか。でもケイが気にするようなことでもないと思うけど？」

確かにそうだ。ラス・メイの一件はケイにはまったく無関係であるし、だから町を出たらしいラスを追ってハルカとレッドも町を離れる、ということも無関係だ。しかしそこにデューンが加わるとなると、話は別だ。デューンはケイの雇い主であるし仕えるべき主なのだ。

ケイはじつとデューンを見つめる。

向けられた、いつもとは違うケイの強い視線。デューンのその言葉の意味、理由をなんとしても聞き出そうとする意思が感じられる。別に隠すほどの理由はない。デューンは答えた。

「レッドたちにも言ったけどね、言葉通りの意味だよ。僕も町を出

る。ただそれだけのことだよ。そしてもうここには戻らないっていうこと。ラスを見つけるまではレッドたちと一緒にいるつもりだけどね」

「……戻らない？」

「うん、戻らない。僕はオーランの姓を捨てることにしたんだ。ただのデューンに戻ることにしたんだ」

「……どうしてですか？」

「まあ、理由はいろいろあるけど。でもね、本当を言うはずと考えていたことなんだ。ここを出よう、大神官補なんて偉ぶった肩書きは捨てよう、てね。でも、中々……ね。やっぱり中々楽な生活は捨てられるものじゃないよ」

黙り込み俯いてしまうケイ。

「ごめんね、ケイ。いい加減な主で。でも大丈夫だよ。僕がいなくなったことで、君や他のみんなが悪く言われることはないと思う。何か責任を取らされる、とかね。それに君にはイレナ様がいるだろう。本当に困ったことになったらイレナさまに相談すれば大丈夫だよ」

「でも私は……デューン様にお仕えしているんです」

うつむいたままケイはぼつりともらず。

「確かに以前はイレナさまにお仕えしていましたけど、今はデューン様が私のご主人様です」

「ケイ？」

「デューン様」

顔を上げたケイの面に、もう困惑を見て取ることは出来なかった。そこには決意があった。

「私もご一緒させてください」

「え？」

「私の主はデューン様です。デューン様がこの町を出るというのなら、私もご一緒させてください。もう戻らないというのなら、私もご一緒させてください」

「え？ いや、でも……」

「お願いします、ご一緒させてください。私――」  
急な発熱でも起こしたように、ケイの顔が真っ赤になる。

「デューン様と一緒にいたいんです」

ケイの告白にデューンは目を丸くする。少女にしか見えない少年をあらためて見つめる。その視線に耐えられずにケイは俯いてしまう。しかしすぐに顔を上げ、まじまじとデューンを見つめることになった。

「いいよ」

デューンがそう言ったのだ。

「いいよ」

「デューン様……」

「ケイがそれを望むなら、僕にとにかく言うことは出来ないしね。でもいいの？ しなくてもいい苦勞をすることになるけど」

「それはデューン様だって」

「まあね。それは覚悟の上だよ」

「私も同じです。デューン様、だからどうか――」

ご一緒させてください。言葉にはせず、ケイはただデューンを見つめる。

「うん。いいよ」

デューンはもう一度言って、

「さあ、そうと決まったらケイ、君も準備をしなくちゃ」

「あ、はい」

ケイは笑顔で頷いた。

## その16

デューンが「同行する」と言った時にも驚いたレッドとハルカだから、さらにケイも加わると聞いたとき、二人が驚くのは当然だった。ケイに理由を尋ね、デューンと一緒にいたいからと聞いたとき、二人は呆れ、考えを改めさせるために言葉を尽くした。

「まあ、待て。早まるな。もう少しよく考えろ」

「そうよ。人生に絶望するには早すぎるわ。もう少しよく考えて」

「ひどいなあ」

それを聞いて、デューンは苦笑いする。

ケイはレッドとハルカに、心配してくださってありがとうございます、と礼を述べた上で、デューンたちに着いていく、と言い切った。決意は固いようだった。ケイを翻意させることが無理だとわかると、デューンだけでなく、ケイの同行も認めるしかなかった。

——ということを、大神官ルマ・ヤダイ・オーランとノード・イグニスはもちろん知らない。彼らはデューンにラス・メイを追うことを命じたが、その命をデューンはレッドとハルカに実行させるものと思っていたし、デューン自ら赴くどころか、そこにメイドまで同行するとは考えてもいなかった。なので二人がこの事態の処置をデューンには任せられない、と改めて考えたのは、それが理由ではない。ラス・メイの身柄は自らで（もちろんルマあるいはイグニス本人が、という意味ではなく、自分たちに忠実な、もっと信頼の置ける者を使って）確保すべきだと考えたのだ。

「しかし教団のやり方、納得できませんね」

「確かに。ラス・メイの件をこちらは快諾したのだ。あとは任せておけばよいのに——」

「しかし彼らがメイ家を訪れなければラス・メイの失踪を知るのもっと後になったでしょう」

「確かに。だが分からんな。教団は何を考えている？」

「裏があるのは確かでしょう」

「ラス・メイに秘密があるとでも言うのか？　どんな秘密があるのかは知らんが、たった一人の娘に振り回されるとは……」

「しかしそういうことなら大神官補に任せておくのはまずくありませんか？」

「うむ、そうだな。ならばラス・メイの身柄確保はもつとわれわれに忠実なものに任せたほうが良いな」

「そうですね。――ならばあの二人はどうでしょう。例の兄弟」

「あの二人か……。大丈夫かな？」

「大丈夫でしょう」

――そしてまたラス・メイ確保のために動くものたちがここにもあった。他ならぬルマとイグニスが疑いを持った『教団』の者たちである。

教団使節団は王宮の敷地内にある来賓館の一棟に宿泊している。最初は七日間の滞在予定であったのだが、急遽、今日に午後には発つことになっていた。むろんラス・メイ失踪事件を受けてのことである。その準備のために皆が忙しく動き回っているのかといえそうではなく、使節団代表トラニー・トランのために用意された一室に、トラン自身も含め、使節団の七人全員が集まっていた。

ソファに深く身を沈めたトラニー・トラン。テーブルを挟んで同じようにソファに身を沈めている人物が一人。背後に並んで立つ五人と同じように、室内だというのにマントを羽織ったままだ。しかし彼らとは違い、フードは跳ね除けている。あらわになった顔は少女のものだ。透き通るように肌の白さと瞳の青さが目を引く。無表情だ。感情を押し隠した無表情。対面しているというのに、少女はトランを見てはいない。そっぽを向いている。トランに気にした様子はない。

「やはりあの方はどこにいてもあの方ということですね。今回もま

んまと出し抜かれてしまいましたよ」「あんたが間抜けなだけでしょ」

そっぽを向いたまま言葉を返す少女に、気を悪くしたふうもなくトランは笑った。

「はは。これは手厳しい。まあ、確かにあの方を甘く見ていたことは認めますよ。最後の一夜くらい家族団欒、というものを楽しんでもらおうと思ったんですけどね。いらぬ仏心だったと後悔はしています。でもそのおかげであなたに出番が回ってきたともいえるんじゃないですか。リリース」

皮肉ですね。そう続けたトランを少女は睨みつけた。

「失礼」

謝罪の言葉を返しはしたが、そこにはまるで誠意がこもっていないかった。

リリースは再びそっぽを向く。

「いつまでも不機嫌でいられても困ります。だってそうでしょう。それがあなたの役目なんだから。あの片を捕らえる事が出来るのはあなただけなんだから。リリース」

「分かってるわよ。でも気が乗らないの」

「分からないでもありませんが……。でもこれはマイトレイヤ様の命ですよ」

「分かってるわよ。そんなこと」

少女の声には、抑えられない苛立ちがにじみ出ていた。

## その17

自分たちの置かれている状況をクリスは良く理解しているつもりだ。家出をしたのだ。町を出てきてしまったのだ。今頃メイ家は大騒ぎに違いない。知らせを受けて、レッドとハルカも駆けつけていることだろう。

マリエ、ナタリー、レッド、ハルカ——四人には恩を仇で返してよくなまねをして本当にすまないと思っている。しかし後悔はしていない。ラスと一緒に居られるのに、後悔なんかするはずがなかった。クリス、ラス、シルフィの三人は、ともかくも町を離れるために歩を進めた。本来なら眠っている時間からだを動かすというのは思ったよりもこたえるようで、夜が明けるところにはクリスはへとへとに疲れていた。もう歩けない——弱音を吐きそうになるのを必死に堪えていた。

「お腹がすいたわ。どこかでご飯にしましょう」

ラスの言葉を聞いたとき、クリスは安心のあまり、へたり込みそうになった。シルフィは声を上げて素直に喜んでいる。妖精に疲労の色はない。それもそのはずで、シルフィはクリスの肩に止まっているか、宙に浮いて羽も使わずふわふわと浮いていただけなのだから、けろりとしているのも当然だろう。疲労の色を見せていないのは、ラス・メイも同様だった。まるで疲れた様子がない。特に休憩を必要とはしていない筈だ。だから先の言葉は、クリスのために言ったもののなのかも知らなかった。お腹がすいたというのは本当だとしても。

「ところでさあ、ねえ、ラス」

注文した料理が来るのを「まだかなあまだかなあお料理まだかなあ」と自作の歌を口ずさみながら（もちろんクリスの肩に腰掛けて）楽



しそうに待っていたシルフィが、ふいに思い出したように、向かいに座るラスに尋ねたのだった。

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないの。家出の理由」

ラスはすぐには答えなかった。シルフィをじっと見たあと、やがてぼつりと

「いろいろと事情があるの」

「その事情を聞いているのよ」

またラスはじっとシルフィを見る。ラスの凝視をシルフィは涼しげに受け流す。

「私たちには聞く権利があるはずよね。付き合っただけであげてるんだから。私は違うっていうんならそれでもいいけど、クリスにはあるはずでしょ、その権利。だったらラスは答えなくちゃならないんじゃないの」

ラスはクリスに視線を移す。クリスはラスに見つめられてどぎまぎしながらも

「う、うん、本当言うと僕も聞きたい、ラスの家出の理由。どうしてもラスが答えたくないっていうんなら、聞かないけど」

ラスはすぐには答ええない。クリスの上から視線を動かさない。クリスは真っ赤になりながらも、ラスの視線を受け止めている。

「教団——て、知ってる？」

おもむろにラスが言った。ラスの意図がわからず、クリスは戸惑いながらも頷く。

「うん。名前くらいなら」

「それがどうしたの？」

シルフィのもっともな質問。ラスは答える。

「それが理由」

「へ？」

シルフィとクリスの声が重なる。二人は不思議そうにラスを見る。『それが理由』というからには『それ（教団）が（家出の）理由』といううことなのだろうが、さっぱり意味がわからない。

「ねえ、ラス。言ってる事がよくわからないんだけど」

「お待たせしました」

クリスの問いかけにラスが答えるより早く（答える気があったとして、だが）、店の女給が、三人が注文した料理を持ってきた。にこやかな笑顔で料理の載った皿をテーブルに置く。その際、ちらりとクリスの肩に乗っているシルフィを見やる。「わあ、おいしそう」目を輝かせる妖精にぎよつとして、しかし笑顔を消すことなく（多少引きつっていたが）、「ごゆっくりどうぞ」そう言って慌てて立ち去っていく。

おいしそうに湯気を上げているのは、麺料理である。茹でた麺に、野菜とに区を程よく混ぜてペースト状にしたソースがまんべんなくかけてある。

クリスはすぐには料理に手を出さず、ものいいたげな視線をラスに向けている。ラスもクリスの視線から目をそらすことはしない。おもむろに顔の前で両手を合わせる。

「いただきます」

小さくお辞儀をして、ラスは料理を食べ始めた。

こうなつては仕方がない。クリスもまた手を合わせ、シルフィも手を合わせる。

「いただきます」

「いただきますあす」

クリスはまず、小皿に麺料理を載せ、細かく箸で切る。シルフィの分だ。待ちかねていたシルフィは、もう一度きちんと手を合わせて食事に取り掛かる。どこからともなくフォークを取り出し（シルフィに合うスプーンや箸はないので常に携帯しているようだが、どこに仕舞い込んでいるかはわからない）、ソースをたっぷりと絡ませて麺を口に運ぶ。フォークごと食べてしまいそうな勢いでかぶりつく。咀嚼するたびにシルフィの目がきらきらと輝く。

「うん、おいしい」

クリスも同感だった。

「おいしいね、ラス」

ラスは口をもぐもぐさせたまま、黙って頷いた。クリスはラスのそんな仕草が可愛くて小さく笑ってしまう。

「何？」

「ううん、なんでもない」

「そう」

ラスは頷いて、二口目にとりかかる。クリスもまた麺を掬う。ラスとこうやって一緒に朝ごはんを食べている。その事実がクリスの口元をゆるませる。

「いやらしい」

視線を下ろすと、シルフィが睨んでいた。

「何がさ」

「にやにや笑っちゃってさ。エッチなこと考えてたんでしょ」

「考えてないよ！」

自分でも驚くほど大きな声が出てしまい、クリスは慌てる。急いで口を手のひらで塞いだが遅すぎる。クリスの声は目を丸くして彼を見上げているシルフィだけにではなく、店内の皆に聞こえてしまったあとだったからだ。だからラスに叱られる事にもなる。

「クリス、静かにして。みんなに迷惑でしょう」

「ごめん」

ちよっとした自己嫌悪に、クリスは小さく溜息をつく。その溜息まで聞こえてしまったわけではないだろうが、なんだか多くの視線が注がれているような気がして、思わずあたりを見やった。見られている。クリスが、ではない。見られているのはシルフィだった。

「ねえ、シルフィ。みんな見てるよ」

「そうね」

シルフィは驚いた様子もなく答える。彼女はとうに気付いていたのだ。

「でもまあ仕方ないわよ。私ってばちょー可愛いし」

「いや、それは関係ないと思うけど」

軽く流すクリスを、シルフィは睨みつける。

「でもまずくない？ 一応僕たち——」

家出してるわけだし。声に出さなかった言葉を、ラスはきちんと聞いていた。クリスとシルフィの会話になど興味なさげに食事を取っていたラスが答えたのだ。

「クリスの言う通りね。あまり目立つのはよくないでしょう。私たちは正式な手続きを取らずに町を出てきているんだから。もし誰か——レッドたちが私たちを捕らえに来たとしたら、すぐに見つかってしまおうわ」

クリスにはよくわからなかった。何故レッドたちが自分たちを捕らえに来る、という話になるんだろうか。そう思ったのはシルフィも同じで

「ちよっと待って。レッドたちが私たちを『捕らえる』ってどういうこと？」

「もちろんレッドがそんなことに与しない人だという事は分かっているけど、でも結果的にそうなってしまおうでしょうから」

「はあ？」

ラスが質問に答えたとは思えない。シルフィにはそれが独り言にしか聞こえなくて、返した声には少し陰が含まれていた。ラス自身も説明不足だと感じたのか、一度口を閉ざし、何か考えるふうであったが、再び口を開いた。

「教団——ダークパレス……。私はそこで生まれたの」

唐突な言葉だった。

「——そこから逃げてきたの。そして母さんたちに出会った。母さんは『これから家族になるんだよ』って言ってくれて……。だから私は『ラス・メイ』になることが出来た」

「よくわからないんだけど」

「つまりこういうことよ」

首をかしげるクリスに、シルフィは説明する。

「ラスはあの町の生まれではなかった」

「うん、それはわかった」

「ラスとマリエたちは血の繋がった家族ではなかった」

「うん、それは知ってる」

「わかってるじゃないの。余計なこと言わせないでよね」

「シルフィが勝手に言ったんじゃないか」

「静かにして」

決して大きな声ではないが、有無を言わせぬ力がそこにはあった。  
クリスとシルフィはおとなしく口を閉ざす。

ラスは言葉を続ける。

「つまり、私は誰にも見つかりたくないとの。教団の人間はもちろんだけど、レッドたちにも。知ってる人には会いたくないの」

「どうして？」

ラスは答えない。答えたのはまたしてもシルフィ。

「つまり、誰の目にも留まることなく、人知れず他の町に行きたいってこと」

「ええ、そう」

ラスが頷いたのを見て、シルフィは胸をはりクリスを見上げる。

「ほら見なさい」

「でも当てはあるの」

得意満面のシルフィを、クリスは相手にしない。唇を尖らしたシルフィだが、ラスの答えを聞くと、溜息をついた。

「ないわ」

「ないわ、てねえ……。そんな堂々と言うものじゃないでしょう」

「でも、ないもの」

言い切るラスに、シルフィは言葉を返せない。

「だったら、さあ」

おずおずと口を挟んだのは、クリスだ。

「僕の住んでた村に行かない？」

「クリスの、村？」

「うん。僕とシルフィはそこから来たんだ」

「クリスの、故郷？」

「え？ うん、まあ、そうだね」

「クリスの、ふるさと……」

「ええ、帰るのお」

不満そうにシルフィは声を上げる。

「グラハム、きつとがっかりするよお」

クリスは慌てて弁明した。祖父を失望させるのはもちろん本意ではないから。

「帰るわけじゃない。ちょっと寄って行くだけだよ。そこでゆつくりラスの目指す場所を考えればいいと思ったただだよ。もし村にく前にいい考えが浮かんだら、そっちを取ればいいだけなんだしさ」

「ふーん」

シルフィの見上げてくる視線にクリスは横を向いた。何もかもお見通しだと言わんばかりのシルフィの視線——正直、苦手なのだ。

「じゃあ、そうしましょう」

クリスの提案をラスは受け入れた。

「取り合えずクリスの村を目指しましょう。それから先をどうするかは、道々考えるところとして」

「うん、それがいいよ」

クリスの声は弾んでいる。シルフィはクリスを見上げにやにや笑う。

「何だよ」

「別に」

余裕の表情でクリスのとがった声に答えるシルフィ。独り言のようなラスの声がクリスに届く。

「クリスの故郷……。楽しみね」

ラスの小さな笑顔。

「う、うん」

クリスの胸は、ときどきとしてきた。

## その18

町を出てすぐに、デューンたち一行は、ラス・メイに関する有力な情報を手に入れた。

『羽を生やした小人を連れた少年と少女』の目撃情報がそれだ。

『少年と少女』——もちろんそれだけでは、この二人を誰であるかとは特定できない。しかしそれが『羽を生やした小人を連れた』となれば話は別だ。羽を生やした小人——それはもちろん妖精のことで、つまりシルフィ・シルフィーナのことに違いなかった。とすれば少年と少女というのは、クリスとラスに違いない。

「見つかったな」

この情報をつかんだとき、レッドは自身ありげにそう言ったものだった。ここまで決定的な手がかりをつかめば、子供二人を見つけるなどわけのないことだと考えたからだ。しかしそうはならなかった。頻繁に目撃情報は手に入るのだが、一向にラスたちの姿を見つけることがなかった。一度、目撃情報が途絶えたことがあった。一行は仕方なく宿を取って一晩過ごした次の朝、宿屋は大騒ぎになっていた。「妖精を見た」と皆が興奮しているのだ。しかし一行の誰一人として、シルフィを見てはいない。四人は途方に暮れた。「一体どういうことだ？」しかしシルフィがここに通ったことは確かだ。四人は妖精がどこに向かったかを聞き出すと、困惑は消えないままにその後を追うのだった。街道を外れ、森のほうに向かったらしい。

ラス・メイを追うデューンたちは、しかし自分たちが尾行されているとは気がついてはいないようだった。デューンたちを尾行しているのは、キアン・ラージとトマ・ラージと言う兄弟。彼らは大神官の命を受けてデューンたちを追跡していた。正確に言えば大神官に命じられたのは「ラス・メイを捕らえ、連れ戻すこと」。そこでラージ兄弟は一計を案じたのだ。同じ命令を受けているデューンたち

を尾行し、彼らがラス・メイを見つけたとき、横からラスを奪えばよいのだ、と。大神官がデューンに与えた命令が撤回されたことは、そのときに言えばよいことだ。

「いいか、トマ。この仕事はなんとしてもやり遂げるんだぞ」  
頭ひとつ分高い弟を見上げながら、キアンは言った。

「わかった」  
弟の返事が当てにならないことはよくわかっているので、キアンは念を押す。

「この仕事は本当に重要なんだぞ。大神官様とのつながりを持っておくためにな。そうすればきっと俺たちにも運が向いてくるはずなんだ」

「大丈夫だ。わかってる。キア兄」

「本当にわかってるんだな」

もう一度念を押す。

「わかってる。大丈夫だ」

トマは自信たっぷりな答え、胸を叩いた。

本当にわかってるんだな。もう一度言いそうになり、しかしキアンはやめた。きりがいいからだ。

一昨日には、デューン一行とラージ兄弟が通ったその街道を往く一団があった。

黒尽くめの一団である。黒いフードに黒いマントと、皆同じ格好でいるが、五人は徒歩、二人は馬上という違いがある。徒歩の五人は全員フードを目深に被り俯き加減に歩いているから、下から除き見ない限りは素顔は見えない。対して馬上の一人はフードを跳ね上げ、素顔をさらしている。青年だ。馬の背に揺られながら、にこやかな表情で道行く人々を眺めている。もう一人の馬上の人は、徒歩の五人と同じようにフードを深く被っている。しかし俯いているどころか、胸さえ反らして手綱を握っている、その顔がまったく見えないというわけではない。といっても見えるのは形の良い唇と頬ぐ



らいままで目元までは見えない。しかし美しい人であるに違いないと、フードの奥まで覗き込みたくなるような白い肌と、思わず触れたいような薄桃色の唇だった。唇が開いて声が発せられた。少女の声だ。涼やかで美しい声ではあったが、どこか居丈高に響く声だった。

「トラン、お腹がすいた」

それを受けて馬上のもう一人が呆れ声を返す。

「もうかい。町を出る前に食べてきたじゃないか」

「何か甘いものが食べたい」

トランの声が聞こえていないように、少女は続けた。何を言ったところで彼女は聞きはしないと分かっているトランは、仕方なく答えた。溜息を一緒につくのを忘れない。

「はああ、仕方ないな。じゃあ、ここらで休憩といきましょう。でもリリスのお眼鏡にかなうような店があるかな」

とりあえず一行は目に付いた一軒の店の前で止まった。店の中に入ったのは、しかしトランとリリスだけで、後の五人は二頭の馬と一緒に店の前で一塊になって、二人が食べ終えて出てくるのを待つようだった。

フードを跳ね除けたリリスは、見かけによらない逞しい足取りで、空いているテーブル席に腰掛けた。やれやれ、と肩をすくめて、トランもその向かいに落ち着く。リリスはテーブルの上に置かれているメニュー表にちらりと目をやると、すぐにそれをトランに渡す。受け取って、トランはじっくり吟味するように目を通す。

「ご注文はお決まりですか」

女給がやってきて、そばに立った。

「甘くておいしいもの」

リリスはメニュー表のどこにも乗っていない商品を注文する。女給はすぐには言葉を返すことが出来ず、弱りきった顔でリリスを見つめよう。

「何?」

リリスの鋭い声に女給は慌てて頭をさげる。

「すいません、いいですか？」

トランの声に、女給は救われた思いで頭を上げた。

「私は、この『果物と野菜のスープ』を」

「はい、承りました」

「それと、彼女の注文はそちらにお任せします。何かお薦めの一品でも持ってきてください」

「お薦めの一品ですか……」

「ええ」

「……はい、承りました」

女給の答えはすっきりしないものだった。結局、難題を抱えたまま厨房に戻るようになった彼女はきつとこう思っている。『こういうお客さんで、本当に困るのよね』

「あーあ、かわいそ」

女給を見送りながら、リリスが言った。

「『お任せします』なんて言ってさ。適当なこと言えばいいのに」

「それはあなたでしょう、メニューにないものを注文して」

反論され、リリスはむつと頬を膨らませた。

「だってどれが私の食いたいものかわからないでしょう。適当に注文してもし嫌いなものが出てきたらどうするのよ」

「そのときは、それも私が食べますよ」

「食い意地が張ってるのね」

「だって残すのはもったいないでしょう」

言い返されたことが気に入らないのか、リリスは唇を尖らせる。

「どうしました。何か気に障るようなことを言いましたか」

「うるさいな」

どうやらリリスの不機嫌スイッチを入れてしまったようだったが、トランにそれをまったく気にした様子はなかった。

「ご機嫌斜めですね。やはり『あの方』を追うのは気乗りしませんか」

トランの指摘は的を射た正しいものには違いなかったが、直截にリリースを不機嫌にさせたのは自分の言動だということには気付かないふりをした。

「そうよ。最初からそう言ってるでしょう」

何であいつのことなんか……。ぶつぶつと続ける。リリースのほうも、トランに対しての苛立ちは後回しにするようだった。

「でも仕方ありません。マイトレイヤ様直々の命なのですから」

「わかってるわよ」

でなけりゃ誰がこんな……。そしてまたぶつぶつと続ける。

トランは何も言わずにおいた。同情したり慰めの言葉をかけたりすれば、リリースはさらに不機嫌になるに違いないから。トランが何も言わずにいると、それさえも気に入らないのかリリースが睨みつけてくる。結局今のリリースは何もかもが気に障ってしまうようだった。どうやら先の問題を振ったのはやぶへびだったようだ。トランはリリースの鋭い視線にはまるで気付いていないというふうに、ふいと横を向く。あの女給が盆を捧げ持ちながらやってくるところだった。

「やあ、料理が来たようですよ」

にこやかにトランに言われては、睨み続けているのも馬鹿らしくなる。リリースは視線を緩めると、ひとつ息をついてみた。

「あなたの注文した料理——どんなものが出てくるのか楽しみです  
ね」

確かにトランの言うとおりだ。一体どんな料理が来るのだろう。無責任な注文をしたので仕方ないが、口に合わない料理が出てきた場合是最悪だ。

「お待たせしました」

女給がテーブルのそばに立った。彼女の笑顔がぎこちないのは、間違はなくリリースを恐れているからだろう。

「こちら『野菜と果物のスープ』になります」

テーブルに置かれた皿の中には琥珀色の液体が満たされていた。立ち上るふくよかな香りが気分を落ち着かせてくれる。スープの中に

は小さなダイス状の赤い果肉が浮いている。干し果肉を細かくしたもののだろう。何の果肉科まではわからないが。

「こちらオムレットケーキになります」

リリスの前に置かれた皿にはオムレツが載っている。しかしオムレットケーキと言うからにはただのオムレツではあるまい。リリスはじろじろと観察したあと、フォークを手に取ると思い切りよくグサリと突き刺した。そのままフォークを下ろしていき二つに割る。半熟卵の黄身のように中からとろりと黄色いものがたれてきた。リリスはフォークを引き抜くと先に付いたそれを舐めてみる。途端にその表情がぱっと輝く。

「あまーい、おいしいー」

それを聞いて女給はほっと胸を撫で下ろす。

「それではごゆっくり」

しかしまた無理難題を吹っかけられてはかなわないとばかりに、足早に厨房に戻っていく。

リリスに女給の態度をきにしたふうはなかった。彼女は満面の笑顔でケーキを掬い頬張っている。こんなに幸せそうなリリスを見るのはトランは初めてだった。トランの記憶の中ではリリスはいつも不機嫌そうにむすつとしてるのが常なのだ。彼女も普通の女の子だったということ——同じ年頃の女の子と変わらないところもあるということだ。こうして甘いものを頬張り、こんなに幸せそうに笑っているんだから。

「よかったですね」

知らぬ間にトランも笑顔を浮かべていた。そして、琥珀色のスープが冷めないうちに食べることにした。



## その19

ラスとクリスとシルフィの三人は、今はもう街道を進んではいけない。ラスに言われるまでもなく、行く先々で、指をさされ、ひそひそと声を交わされるのを見れば、クリスたちもさすがに目立ちすぎると思うようになったし、それに行き先がとりあえずはクリスの故郷と決まったからには、街道を往くよりも、森を進んでいったほうが早かったからだ。無論森の中の移動になれていないものには逆に倍の時間がかかることになっただろうが、幸いクリスは森に慣れている。それに『森と風の妖精』シルフィ・シルフィーナと一緒にいるのだ。めったなことが起こるはずがなかった。

シルフィは本来の居場所に戻り、いつにもまして生き生きとしていた。ラスも森のなかを一日中歩き夜を明かす、という初めての経験のためだろう。珍しく興奮しているように見えた。クリスは、ラスの新たな一面が見られたことがたまらなくうれしい様子で、森の中にはいつてからこっち（いや、ラスと町を出てからずっとなのだが）いつもニコニコしていた。

ちよつとした非日常――少なくともあの町にいては体験することのなかった日常――が、ラスを饒舌にしていた（と、いつでもやはりラスはラスに違いなく、シルフィのように舌に油が塗られたようによく喋る、ということとはなかったが）。

クリスの故郷って、どんなところ。

いいところだよ。とてもいいところ。あるのは自然ばかりで町の生活に慣れたラスには不便かもしれないけど、でもやっぱりいいところだよ。

それにとっても食べ物がおいしいのよ。野菜も果物も採れたてでとっても新鮮。ラスもきつと気に入るわよ。

そうね。

短く答え、ラスは微笑む。その微笑はクリスを幸せにさせる。

どこか遠慮がちな微笑——自身の内側からこぼれでる、喜びとか嬉しさとか楽しさとか、どうにも抑えられない感情が漏れ出ているようなラスの笑顔。

もっと見たい。クリスと思う。ラスの笑顔をもっともっとたくさん。これから一緒にいられるのなら、その願いはかなうだろう。

クリスも笑顔になっている。シルフィだけ面白くなさそうに唇を尖らせている。今まで独り占めしていたのにこれからはそうも行かなくなった。クリスはラスに夢中だ。

\*\*\*

おそらくもう街道を進んではいまい。森の中だろう。——デューンたちのその推測は当たったわけだ。しかし肝心のラス・メイの姿をまだ見つけてはいない。

「本当に大丈夫なの？」

だがハルカが不安を口にするのも無理はなかった。かみの目を持たない彼らには、自分たちの選択が間違っていない、ということがわからないのだから。

「これでもしラスたちが、街道を進んでました——なんてことになるってたら、私たちがただのバカの集まりってことになるわよ」

前を歩くレッドに向けた言葉は厳しい。ハルカの隣でケイも同意するように頷き、不安に揺らぐ視線をレッドの背に向ける。対して男性陣は（いや、ケイも男子なのだが）、不安とはまったく無縁の様子だった。

「それはないだろう。目撃情報が途絶えたということは、ラスたちを見かけたものがいなくなったということだ。つまり、ラスたちが街道を進んではないということだ。さすがに目立ちすぎると気付いたんだろう。妖精と一緒にいればな、それは目立つだろう」

「そうとは限らないでしょう。シルフィさえ姿を隠していれば目立たないってこともあるじゃない？」

「姿を隠す？ ああ妖精がか？」

逆に問われ、しばらく考えた後、ハルカは答えた。

「しないか、やっぱり」

「あの、でも……」

ケイはシルフィのことを三人の大人たちから事前に聞いていたわけではないので、今ひとつ会話の意味を理解できないながらも、問いかけていた。

「ラス様たちがそんなに目立ったのなら、どうして私たちは見つけれなかったんでしょう。あんなにたくさん、ラス様たちを見た、という人がいたのに」

ハルカは、その答えはレッドが知っていると言わんばかりに、レッドに視線を向けた。デューンにも答えようはないので、彼もレッドを見る。レッドは答えた。

「おそらくシルフィの仕業だろう。妖精の力、というわけだな。無論これは俺の考えで本当のところはわからないがな。しかしそうでもなければ説明はつかんだろう」

「妖精の力、か……。早く会いたいな」

夢見るようにデューンが呟く。

「ラスを見つけたら嫌でも会えるわよ、一緒なんだし」

「そうだね。早くラス・メイを見つけないと」

デューンの言葉に、レッド、ハルカ、ケイは三者三様に頷く。しかしそこに使命感といったものはまるでない。なるようになる、と悠長に構えている様子だった。

だからラス・メイの後姿さえ捉えることも出来ず、森の中で夜を明かすことになっても、誰一人、不平も不安も口にしなかった。むしろ訪れたこの状況を出来るだけ楽しんでしまおうとしているようである。さえた。

デューンは集めた枯れ枝で火をおこしている。ケイはちゃかりと用意していた、水に戻して食べる穀物と干し果物を水を張った鍋にかけて（この鍋はケイが屋敷から持ってきたものだ。大荷物を背負っ



ていると思ったら、調理道具一式を用意していたのだ。ちなみに水は、近くに流れている小川から汲んできた）、食事の準備をしている。レッドとハルカはまだ明るいうちに仕留めておいた鳥をさばいている。さばいた肉を木の枝を削った串に刺している。

小一時間すると、食事の時間になった。

今夜のメニューはおかゆ（水で戻した穀物を程よく炊いたもの）、干し果物の焚き物（こちらも調理方法は同じ）、鳥の串焼き、である。ケイは火にかけてある鍋の中から椀におかゆをよそい各々に配る。干し果物の焚き物は各人で自由にとって食べれるように大皿に盛ってある。鳥の串焼きは火の回りに串ごと勢いよくぐざりと刺してある。最後のケイが自分の分のおかゆをよそったのを確かめるとデューンが音頭を取る。

「それじゃあ頂こうか」

皆いつせいに手を合わせた。

「いただきます」

そしてめいめいに食事に取り掛かる。

おかゆを一口食べてハルカは嬉しそうに頷く。

「うん、おいしい。このほどよい塩加減がちょうどいいわね」

「ありがとうございます」

ケイが頭を下げる。もちろん調味料も食器たちと一緒に鞆に詰めていた。

「この干し果物もうまく炊けている。柔らかすぎず硬すぎず絶妙だ」  
レッドに褒められまた頭を下げるケイにデューンは笑顔を向ける。

「本当にケイに来てもらって良かったよ。森の中でもこんなおいしいものが食べられるんだからね。それにこの串焼きもおいしい。肉汁が甘い。こんなにおいしいとは思わなかったな。実は少し心配だったんだ」

「失礼ね」

膨れて見せるハルカ。レッドは笑う。

「ははは。まあ、そうだろうな」

「でも本当においしいです」

鳥の脂で口元を光らせているケイに、レッドもハルカも微笑んでしまう。

「いいわね。こういうの」

ハルカがぽつりと漏らす。

「ああ。目的を忘れてしまいそうになるな」

「それは困るよ。僕は今度こそ妖精に会わなきゃならないんだから」

「あの……ラス・メイ様を見つけることが先決なのは」

「そうだけどね。僕にとっては妖精に会う事のほうが重要度が高いんだよ。でも、ま、ラスに会えば妖精に会えるわけだから問題ないけどね」

「その通りだが、もう少し建前というものも気にしたほうがいいと思うぞ」

「努力はしてみよう」

「そんな気無いくせに」

デューンは肩をすくめてみせた。レッドは小さな苦笑を交えながら言った。

「やれやれだな」

そんなやり取りがおかしくてケイはくすりと笑ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0877i/>

---

フラットなアオ（ワールドレシピ）

2010年10月8日12時04分発行